

五

元

集

九

五元集

五元集

延室

貞亨

室永

天和
元禄

室晋齋ハ米元章の硯の裏に
鐫入らう号し三弄子其硯
を予ふりて室晋齋を
いとけぞやうくふりて
を予ふりて室晋齋を
恒玄龍の額を需しるもの
軒葉はうけう

其角

四十の賀し給へる家にて
御祕藏に墨を摺せて梅見哉

遊二大音寺一

んめがゝや乞食の家も覗かるゝ

加州小松観音寺奉納

梅の花旦那を待て庭にあり

芭蕉翁の沙彌、かけものほし
がりて繪譜を乞けるに

せめてもの貧乏柿にんめの花

曉

進上に間をかねてやむめの花

不曲亭

あぜを越目あても梅の句哉

こつとりと風のやむ夜は藪の梅
なつかしき枝のさけ日や梅の花

宰府奉納

守梅の遊びわざ也野老賣
和二心水推蔵之句一

たゞく時よき月みたり梅の門

梅津氏の祖父、大坂表の

軍功によりて御感狀御

太刀を頂戴せらる。正月十

七日の朝とかや、佐竹上

杉蜂須賀等の家臣十七人と

也。家の風、相つたえて、

今も正月十七日鏡開の興行

あり。其年、家督執權とし

て此春の賀會有。

幡持を文藻脇やむめの花

元日、眞珠噴あてし人の、

句を祝へといふに

夜光る梅のつばみや貝の玉

仙石豊岐守どの正月五日に

身まかり給ひぬ。玉美公に

御梅申上侍るとて

外様迄手向の梅を拜みけり

元禄十四年二月廿五日、聖

廟八百餘御年忌。於二龜戸

御社一、詩哥連誦令二興行一座。

梅松やあがむる數も八百所

氷肌玉骨とかや

昔見し花にも香にも梅の皮

久松肅山亭にて

梅塞く愛宕の星の匂かな

百八のかねて迷や闇のんめ

芭蕉庵をとひて

鶯や十日過ても同じんめ

うぐひすに藥教ん聲のあや

腕押のわれならなくに梅の花

帯木のぬくいには是にやみの梅

(頭書「止丘隅」)

鶯の身を逆にはつねかな

うぐひすよいで物みせん杉鉢

茶臼にとまりたる繪に

鶯や氷らぬ聲をあさ日山

茶抄にとまりたる繪に

うぐひすの曲たる枝を削けん

鶯に罷出たよひきがへる

うぐひすや遠路ながら禮返し

市隅

竹と見て鶯來たり竹虎落

(頭書「とびあがりしやらしといふらん」)

雀子やあかり障子の笹の影

長嘯の記に、淺草の觀音と

て、國ゆすりてもてなす佛

をはず。口にまかせて

いかなれや野邊に刈かふあきさの

くはんをむまのはみのこしつる

其時をおもひて

土手の馬くはんを無下に菜つみ哉

正月已巳布施の辨才天へ

詣侍る奉納

玉椿畫とみえてや布施籠

梅津硯水會に

窓をやれと梅ほころびぬ大家中

正月廿一日冠里公に侍座

菜刻みの上手を握る蕨かな

接木を斷て

來ませるの申繼とや見えつらん

十二日

お汁粉を還城樂のたもと哉

景清が所帯みせぬや二薺

漸覺春相泥といふ切句

削かけ膏藥ねりの鼻にあれ

畠から頭巾よぶ也わかなつみ

二人しづかのかけ物に

なつみ哉扇二ツをとぶこてふ

百人の雪搔しばし薺ほり

万葉しうにも朱雀の柳と

侍り。所からのけしきを

たびらこは西の禿に習ひけり

とばしりも顔に匂へる薺哉

七種や明ぬに彈の枕もと

なゝ艸や跡にうかるゝ朝烏

砂植の水菜も來たり初わかな

溪邊双白鷺

沐ふ鶯芹梳る流かな

(頭書「河州八尾娘そしり」)

うすら水やわづかに咲る芹の花

一升はからき海より蜆哉

石一ツ清き渚やむき蜺

白魚や海苔は下邊の買合せ
行水や何にとどまるのりの味

白魚や漁翁が齒にはあひながら
白うをの簪とってにあがるひばり哉
陽炎や小礫の砂も吹たてず
したしき友に

こなたにも女房もたせん水祝

衆鼠入懷の夢をひらきて

引つれて松をくはゆる鼠かな
寶引に蝸牛の角をたゝく也
帶せぬぞ神代ならまし踏哥宴

難波人、福の神を祈りて、

七人が句を奉る中に、大黒

殿をいさめ申せとて、權ひ

とつ送られたり。

年神に樽の口ぬく小槌かな

三月正當三十日

山吹も柳の糸のはらみ哉

(頭書畫成)

梟にあはぬ目鏡や朧月

種かしや太神宮へ一つかみ

舞鶴や天氣定めて種下し

格枝、繪馬合に

ことし斯螽ふえたり稻荷山

禁固ヲ破りて暇ヲ玉ヘル也。

破やぶや見憎い銀を父のため

(頭書待としきかば)

やぶ入やそれはいなばのは星

故赤穂城主淺野少府監長矩

之舊臣大石内藏之助等四十

六人、同志異体報亡君之

體一、今茲二月四日官裁

下令ニ一時伏レ及齋ヲ屍。

万世のさえづり、黃舌をひ

るがへし、肺肝をつらぬく。

うぐひすに此芥子酢はなみだ哉

富森春帆大高子葉神崎竹平

これらが名は焦尾琴にも残り

聞える也。

點印半面美人の字を影て、

琴形の中ニ備へタルを、は

じめて冠里公の万句の御巻

ニ押弘め侍るとて

春の月琴に物書はじめ哉

悼三後ノ立志一 初智ノ女也

昔かな初智三井寺夢の春

題水

ちくま河春行水や鮫の髓

畫贊

拾得じつとくの風巾ふうきんにからむや玉簪

爰にけふ御馬水かへ水間寺

奉納

金柑や冬青ふゆぎにさしても稻荷山

藪入や一ツはあたるうらや算

やぶ入や牛合點して大原迄

元祿丙子のとしむ月末つか

たに淺茅がはら出山寺にあ

そび侍り。畠中の梅のほづ

えに、六分斗なる蛙のから

を見つけて、賜の草莖なる

べしと折とり侍る。

草莖を包む莖もなき雪間哉

蝸牛豆かとはかり柳かな

御忌

人の世やのどかなる日の寺林

本多總州公にて

春の夜や草津の鞭のゆめばかり

浅神川泛し舟

河上は柳かんめか百千鳥

柳には鼓もうたず歌もなし

欄干や柳の曲をつたふ狙

市川才牛追善

一子九蔵名をつぎ侍るに

塗顔の父はなからや雉の聲

菜施

黒胡麻でこゝをあへぬか土筆

春雨やひじきものには枯つゝじ

等射あいさつ

闇の夜のをりないかとは梅の袖

新三十三間堂

若艸やきのふの筋見も木綿うり

青柳に蝙蝠つたふたばえ也

柳上鶯の圖に

さかさまに鶯の影見る柳哉

傾城の賢なるは此柳かな

春雨

綱が立てつなが噂の雨夜哉

此雨はあたゝかならん日次哉

二月十五日土京發足

西行の死出路を旅のはじめ哉

渡し舟武士は唯のる彼岸哉

佛若し大晦日に入滅し給は

ば、いかに佛ともんぢや

くすべき。かゝる衆生のた

めには、往生もふのものな

るべし。

佛とはさくらの花に月夜哉

山里の名もなつかしや作獨活

初茸の盆と見えたり野老賣

ところうり壁大原の里びたり

野鼠のこれをくふらんつくし

竹の香や柳を尋ね蔭のとう

梅がゝや此一すじをふきのとう

二月十七日原驛

富士の臙都の大夫見て譽ん

おぼろとは松の黒さに月夜哉

類焼の頃邊鄙の居を問て、

一椀に玉子を送る人に

わらづとや雪の玉水十とよむ

南都にあそぶ

傘や薪の夜のありとをし

無三車馬喧一

夕日影町中に飛こてふ哉

見獅子伶有感

てふしるや獅子は獸の君也と

蝶とぶや猿をよび込原屋敷

薬屑に花を見すてしこてふ哉

釋菜

聖堂にこまぬく蝶の扶哉

百とせはねるが薬のこてふ哉

柳燕圖

乙鳥の塵をうごかす柳哉

茶の水に塵な落しそ里燕

齋さん

燕やかろき巢を曳凡巾

階子からとぶさ(鳥總)に及ぶつばめ哉

海面の虹をけしたるつばめ哉

傘に晴かさうよぬれ燕

廳^{きやう}やひばりあがれと夕日影

うつくしき顔かく雉^{けい}の距^{はし}かな

人うとし雉をとがむる犬の聲

角田川にて

なれも其子を尋るか雉の聲

海苔すゝぐ水の名にすめ都鳥

小田かへす鉄も柱やのこる鴈

爰かしこかはづ鳴江の星の數

ちんば引^ひ蝦^えにそふる泪かな

帆柱のせみよりおろす雲雀哉

苗代や座頭は得たる畝傳ひ

たねおろし俵に渡す小橋哉

景政が片目をひろふ田螺かな

みの路にかゝり侍るに

孫どもの蠶やしなふ日向哉

春雨や桑の香に酔みの尾張

沽徳岩城に逗留して、健別

の匂なき恨むるよし聞え侍
りしに

松島や嶋かすむとも此序

南村千調仙臺へかへるに

行春や猪口を雄嶋の忘貝

富士の繪にのぞまれ侍り

三帆舟は塩尻になるかすみ哉

小庭にうつしたる梅の小枝

に鵲の草莖を見出て、人々

に匂をすゝめけるつゐで

梅の名をうたてや鵲のやどりと

いせの雲津を過侍る、夕げ

とふ頃に

馬に出る子を待門や傀儡師

傀儡師阿波の鳴戸を小哥哥

四睡圖

かげろふにねても動くや虎の耳

三州小酒井村観音奉納

如意輪や舩もかゝす春日影

或お寺にねう比丘とて、腰

のぬけたるおはしけり。住

持の深くいとをしみ申され
しに五ツの徳を感ず。

緩な所喚出すねぶり哉

(頭書「能睡」)

おもへ春七年かふた夜の雨

(頭書「能忘」)

鶉かと鼠の味を問てまし

(頭書「能捕」)

陽炎としきりに狂ふ心哉

(頭書「能狂」)

髭のあるめおとめづらし花心

自得

蝶を嚙で子猫を舐る心かな

足跡をつまこふ猫や雪の中

猫の子のくんづぼぐれつ胡蝶哉

市間喧

つけ木屋の手なら足なら雨蛙

遠遊醉歸の駕籠の内にて

春の夜の女とは我んすめ(娘)哉

宰府参詣の舟中
菜の花の小坊主に角なかりけり

醴ちりに桃李の詩人髭白し
鶏の獅子にはたらく逆毛哉

王子曲水もよほされて

水吞を烏帽子にきせん岩つゝじ
曙やとに桃花の鶏の聲
花さそふ桃や哥舞妓の脇踊
傳え來て雛の寶や延喜錢
見てのみや盜まぬ雛は松浦舟
おはしたに木兎もあり雛座敷
雛やそも茶盤にたてしまろがたけ

三月四日雪ふりけるに

ひなやその佐野のわたりの雪の袖
段のひな清水坂を一目かな
折菓子や井筒に成て雛のたけ
雛のさま宮腹くゝにましゝける

永代鳥八幡宮奉納

汐干也たづねて參れ次郎貝
親にらむ比目を踏ん汐干哉
紀國の鯛釣つれて汐干かな

對酌

もどかしや雛に對して小盞

曲水にあの氣違は茶碗哉

菓子盆にけし人形や桃の花

曲水や算まかする宿ならば

綿とりてねびまさりけり雛の貌

くり言を雛も憐め虎が母

雛くれぬ人を初潮の棧敷哉

緑豆アサの頭も白し桃の肩

順禮はよそに拜むやとり合

貝そろへを送られしに

蛤のしかもはさむか玉柳

行露公あたみへ御浴養の頃、

はなんけの句來るべきよし

仰ありて、觀遊の御書ども

聞えけるに

脇息にあの花おれと山路哉

露沾公御庭にて

寐時分に又みん月か初櫻

縁からはこなた思ふや花の庭

地謡や花の外には松ばかり

花見哉母につれだつ盲兒

いざゝくら小町が姉の名はしらす

黒谷にて

万日の人のちりはや遅櫻

仁和寺

いなづまのやどり木成し櫻哉

上野にて

浮助や扨從見に行櫻寺

妙鏡坊より花送れしに

文は跡に櫻さし出す使哉

花中琴友

饅頭で人をたづねよ山櫻

一筆令二啓上一と招れて

初櫻天狗のかいた文みせん

友猿の友ぎらひすな花衣

三月廿日、含秀亭の山ぶみ

に御供して

御近習や花のこなたにかたをなみ

門柳塵をはらふ折ふしうぐ

ひす啼く。

御用よぶ丁兒ちやうごかへすな花の鳥

矮屋妻奴の膝をいるゝのみ

なるに、心まゝなる酒を呑
て

傀儡の誠うつなる華見哉

石河氏宜雨公の山庄に美景
をあつめて、四方に四の風
情をもてなし給へるに

二筋の道は角豆か山ざくら

護國寺にあそぶ時、馬にて
むかへられて

(頭書) 袁中郎 面上有西湖

白雲や花に成行顔は嵯峨

立君をあはれむ

されありく主よ下人よ花衣

京よりくだる人にとづてし

て

花に逢て親達よばん都哉

寢よとすれば棒つき廻る花の山

山櫻猿を放して梢かな

花折て人の礫にあづからん

花は都物くるゝ友はなかりけり

侍座

花にこそ表書院でお月代

花に來て都は幕の盛哉

華盛子であるかるゝ夫婦哉

はな盛ふくべ踏わる人も有

世の花や五年已前の女とは

日黒松隣堂にて

浮世木を麓に咲ぬ山ざくら

遊二東叡山一 三句

小坊主や松にかくれて山櫻

ハツ過の山のさくらや一沉み

人は人を戀の姿やはなに鳥

芳野山ふみして

明星や櫻さだめぬ山かつら

折に殺生偷盜あり

あだ也と花に五戒の櫻哉

行露公年々御庭の花を給り

ける。ことしおそかりけれ

ば

花を得ん使者の夜道に月を哉

妓子万三郎を供して

その花にあるきながらや小盃

酒のさかなにさくら花をた
しなむ人に

下臥に漬味みせよ塩櫻

惜し花不掃地

我奴落花に朝寐ゆるしけり

雨後

さくらちる彌生五日はわすれまじ

上野清水堂にて

鐘かけてしかも盛のさくら哉

ちる花や踏皮をへだつる足的心

日輪寺の僧と連歌のかたは
らに對興して

花に酒僧とも侘ん塩肴

一食千金とかや

津國の何五兩せんさくら鯛

辛未の春上野にあそべる日

門主慈御のよしをふれて、

世上一時に愁眉ひそめしか

ば

其彌生その二日ぞや山ざくら

花に鐘そこのき給へ喧嘩買

上野 御 （御とは尊相の句の意なり）

わたり徒士見立る頃の花見哉

尋花

植木屋の亭主留守也花いまだ

湖春と清水に遊びて

車にて花見を見ばや東山

花笠をきせて似合ん人は誰

酒を妻を妻の花見かな

（頭書「玉雉山水 寸馬豆 人」）

人

此雨に花見ぬ人や家の豆

永代寺池邊

池を呑大に入あひ花の影

市盛はじめて上京に

花ぞ濃伊勢を仕まへば裏移

大悲心院の花を見侍りて

灌頂の闇より出て櫻哉

茶もらひに此晚鐘を山櫻

折とても花の間のせがれかな

春足袋や笠にのこる初ざくら

明ぼのゝ山鳥 （日本橋子） 櫻かな

海棠の花のうつゝや臘月

小鳥居は葉守の神かつゝじ山

月雪に山吹花の素顔よし

亦是より木屋一見のつゝじ哉

藤咲て鯉くふ日をかぞへけり

旦夕のはしるはじむるつゝじ哉

水影や颯々たる藤の棚

心なき御影さんは（散飯）に岩つゝじ

よそに見ぬ石の五徳や藤の露

白藤を酔みそにつたふ雫哉

浅井川遺迹

鯉の義は山吹の潮やしらぬ分

錦にも藤の風は憎からじ

三月十二日合秀亭の花とし

百五十余種うへ添給へる下

庭に侍りて

植足に三切の供や山ざくら

同く入相 此くと花の名残や笥扇

秋航庭せりせらるゝに

たそがれや藤植らるゝ扇取

龍樹菩薩の禪陀伽王に對し

て食欲をしめし給ふに、た

とへば有翁人近猛煙始難悅

後増苦の文のこゝろを

雁瘡のいゆる時得し御法哉

摩訶止觀に

一目之羅不能得鳥得鳥之羅

唯是一目、此文のこゝろを

鳥雲にゑさし獨の行衛哉

意馬心猿の解

立馬の日は猿の華心

難司谷にて

（頭書「根のは白くあられふり

せき入し水のおとづれもせ

ぬ）

山里は人をあられの花見哉

わが三彌公侍従になりて、
寶永二年三月廿七日に京使
にたち給ふを祝して
藤浪や廿七人草履とり

芭蕉の自讃十三懷周之讃
師の坊の十年しばし柳陰

若鳥やあやなき音にも時鳥
有明の面起すやほとゝぎす
淀舟や犬もこがるゝ郭公
夜這星鳴つるかたや子規
官城
歴くや下馬の折ふし時鳥

河東

川むかひたが屋敷へか子規
鵲啼や此あかつきを郭公
曉の氷雨をさそふや郭公
百間長屋にて

時鳥人のつら見よ下水打
子規一二の橋の夜明かな
阮咸が三味線しばし時鳥

傾廊

時鳥あかつき傘を買せけり
亦打山

夜こそきけ穢多が太鼓關
きぬゝの用意か月に時鳥

(頭書「廬山雨夜」)

寮坊主のまねば淋しほとゝぎす

宰府奉納

ほとゝぎす鳥居くくと越にけり

林中不賣薪

せになくや山時鳥町はづれ

さる江といふ村にて

くらぶ山材場の日陰や時鳥

麓寺五加がおくをほとゝぎす

曲終人不見

曉の反吐はとなりか郭公

時鳥われや鼠にひかれけん

子もふまず枕もふまず時鳥

母におくれ侍りてたのみなき

ゆめのみ見る鵲

夢にくる母をかへすか郭公

根風がつまを供してあたみ

へ行とて

馬の間妹よびかへせほとゝぎす

藝名にて

蛤のやかれて啼やほとゝぎす

それよりして夜明鳥や郭公

點滴を硯に奇也ほととぎす

(頭書「白文」)

人間の四月にふけれ郭公
時鳥茄子も三ツの小籠哉

う月十七日ある人の愛子に
ねだり申されて

郭公幟そめよとすゝめけり
月消て腰ぬけ風呂や郭公
六阿彌陀かけて鳴らん子規

淺神寺樹下

虫つかぬ銀杏によらん郭公
葉に成て書れぬ梅や郭公
ほととぎす只有明の狐落
時鳥人を馳走に寝ぬ夜哉
日の上に目をかく人や子規

夢し盡

砂は目にね覺を洗へ郭公

姉が時の野夫忠功孝心をきこ
しめされて祿を給はりたる事、
世にきこえ侍るを

起てきけ此時鳥市兵衛記

佛さへこの世間はくるしきに
よめなき

しらでやけふは生れ出けん
麦飯や母にたかせて佛生會

風光別我苦二吟身一

大酒に起てもうき拾哉
越後屋にきぬさく晋や衣更

一ツところに袷に成や黒木うり

卯月八日母におくれて

身にとりて衣がへうきう月哉

慈母墓

花水にうつしかへたる茂哉

上行寺

灌佛や捨子則寺の兒

若葉句合に

年寒しわかばの雲の朝ぼらけ

殿つくり並でゆゝし桐の花

夕のはなぶき

うかれめや異見に凋む夕牡丹

いにしへのならのみやこの牡丹持

河島觀心寺

楠の鎧ぬがれしぼたん哉

筑前紅を

しらぬ火の鏡にうつる牡丹哉

雨意 晴上りて、

八事をうつゝに笑ふぼたん哉

池田の海棠子竹柏の行狀をあ

つめて集あめるに

さゝはうし角に火とすふかみ草

下洛、卯月の中の一

隱岐殿のかへり兄はやせ鏡山

朝更百里全阿市盛等上京の

時、三十三句の吟席也(こ

の句は伊豫の湯桁の數によ

りて、左八句、中十六句、右

九句、合せて三十三句を以

て一卷となせる連句の立句

也。)

寶永開元奉幣使御代參の人の

家にて

とした氣で伊せ迄誰か衣がへ

屏風に藤房卿住すつるの所

迷ひ子の三位よぶ也時鳥

長崎屋源左衛門家に紅毛來貢

の品く、奇なりとして

桐の花新渡の鸚鵡不言もいはず

愛娘子

鶏啼て玉子吸蚊はなかりけり

序令初めて上京に饒

(頭書「楊州鶴」)

涼み迄都のそらや連と金

護國寺にあそぶ

水漬に泪こぼすや杜若

かきつばた疊へ水はこぼれても

紫の蛛もありけりかきつばた

簾まけ雨に提來る杜若

奉納

から衣御影やかけて杜若

田家

早乙女に足あらはるゝ嬉しさよ

汁鍋に笠のしづくや早苗取

木賀入湯のところ

しばしとや早苗より見る寺の門

袖裏や茹よりけに白くゝり

舟歌の均しを吹や夕若葉

卯花や蠣がら山の道のくま
うの花やいづれの御所の加茂詣

寄「幻野長老」

老僧の笥をかむなみだ哉

筍よ竹よりおくに犬あらん

竹の尻を折節間や五月閑

(頭書「腰下無寸鐵」)

筍や丈山などの鎗の鞘

素堂居

艸の戸は皆喰ものぞ夏の艸

風子居

夏艸や家はかくれて御用茅

夏草や橋臺見えて河通リ

目通の岡の榎や築さかひ

吐ぬ鶉のほむらにもゆる籬哉かき

鶉につれて一里は來り岡の松

(頭書「壽興」)

争はぬ兎の耳やかたつぶり

戸塚越侍るに

鯉荷の跡は巳日の道者哉

帆をおろす舟は鯉か磯がくれ

夕塩や客の間にあふ中ぶくら

しらすか通る時

世中をしらすかしこし小鯨うり

飯鯨はなつかしき都かな

和重錢に

伊せにても松魚なるべし酒迎

こよろぎの名は昔にてうづは哉

呈「露江公饒」

筍木や人馬へだつる五月雨

さみだれや是にも外を通る人

顔ぬぐふ田子のもすそや五月雨

さみだれや富士の煙の其後は

五月雨や傘につる小人形

さみだれや酒匂でくさる初茄子

嚴有院殿の大法事を東叡山に

拜ミ奉ル

五月雨の雲も休むか法の聲

市驛吟

馬舟とわかる鯉やけいば組

花あやめのぼりもかほる風哉

公門に入時

あやめわく明り障子のみどり哉
錢湯を沼になしたる菖かな

けふもけふあやめもあやめ
かはらぬに宿こそありしや
どおほえぬ

住なれし所へだてゝよめりと
伊せ大輔、家のしうに見え侍
る。

菖こそ蛙のつらにあやめ哉

此友や年をかくさず、白鬚二
毛の身をわすれて、松どの、太
郎どの也けりと、のしれば、今
の人形の風俗、とさらに小兵
衛などいふ人形はなし。

我むかし坊主大夫や花菖

五月三日わたましせる家にて

屋根葺と並でふける菖哉

あひしれる女の塔の澤に入て

ふみこしたるに

山笹の粽やせめて湯なぐさみ

艸の戸やいつ迄草のかび粽

本つゝじ夕べをしめて菖哉

五月十三日

雨雲や竹も酔^{まよひ}日の人あつめ
藻の花や金魚にかゝるいよ簾

酒満

葛のはの酒典童子も二面

青嵐といふ題を

海松の香に杉の嵐や初瀬山

蝙蝠の屎も子になれあやめ草

交代の葉守の神や初柏

抱瘡のあとは遙に蟻哉

綠槐高處

はつせみや笛に袋を十文字

かたつぶり酒の肴に遣せけり

鎌倉やむかしの角の蝸牛

たのめてや竹に生るゝかたつぶり

文七にふまるな庭のかたつぶり

河原町にて

妾が家ほたるに小歌告やらん

宇治にて

川ぐまや水に二重のぼたる垣

うつせみの繪に

夏虫の碁にこがれたる命哉

谷中。

風ふかぬ森のしづくやかんと鳥

僧正が谷

陀しらに貝ふく俯よかんと鳥

下やみや鳩根性のふくれ聲

露江公湖池の高閣にはじめて

涼を挽とき、當座とおせあり

ければ

夏山に我は御簾とる女哉

(頭書「宇都宮入道」)

連生は歌はよまぬを虫拂ひ

樟腦に代をゆづりはの鎧かな

よめりせし時の枕か土用ぼし

捨人や木艸にかけて土用ぼし

浴衣着て瓜買に行袖も哉

狙公 蜀道にて

瓜むいて猿にくはするあつさ哉

水飯にかはかぬ瓜のしづく哉

干瓜やうつむけてほす蟹小舟

瓜の皮水もくもでに流れけり

龜毛に錢

瓜の皮笠は重シとかさねけり

破扇の圖

維光が後架へ持し扇哉

鳥飛紺のあふぎのあつさ哉

紅にうちはのふさの句哉

せみ啼や木のぼりしたる團うはうり

隣から此木にくむやせみの聲

竹のせみさゝらにしぼる時も有

水うてやせみも雀もぬるゝ程

白雨や内儀たまゝ物詣に

市中白雨といふ題

薦の香も夕だつかたに醒し

白雨やもりをとむれば鼠の子

(頭書うぐひすとのみ)

ゆふだちたに鶯あつく鳴音哉

夕立にひとり外みる女かな

牛島三邊みづのへの神前にて雨乞する
ものにかはりて

夕立や田を見めぐりの神ならば

翌日雨ふる。

舟中吟

さゝがにの筑波鳴出て里急ぎ

西行と武藏坊には清水哉

芋のはに命をつゝむし水哉

にんにくの跡が清水の心かな

土用のいりといふ日の吟也。

帚木に茄子たづぬる夕哉

鳥山へおもむく人に

青柳やつかむ程ある蚊の聲に

夕がほや白き鶏垣根より

鳴焼は夕べをしらぬ世界哉

麻村や家をへだつる水車

或人の従者參宮しけるに、は

なむけすとして

夏の夜を吉次が冠者に恨哉

夏の夜は寐ぬに疝氣の起けり

生死去來

鳥行蚊はいづくより暮の聲

捕虎東鑑

七ツ毛の蚊にくるしむや足疾鬼

蚊柱にゆめのうき橋かゝる也

蚊をやくや褒姒が闇の私語

かやり火や蚊屋つる方に老獨

更閑

石灯籠蚊屋に消行鵜舟哉

いきげさにすてんどとうと、う

ちはなされたるが、さめて後

切れたる夢は誠か蚤の跡

旅店

富士の雪蠅は酒屋に残りけり

ある人、大なるふくべを二に

引割て鎌とし、外は地さびの

まゝ、内は朱に塗て、わに口

にむら衛をかゝせて、句をの

ぞむ。

清水影李白が面にかぶりけり

淺草河漢々吟涼

此人數舟なればこそすゞみ哉

川涼み顔に泥ぬる詠かな

涼みつむ安房や上總に舟はなし

すゞしさや帆に船頭のちらし髪

舟暑し覗かれのぞく闇の顔

千人が手を欄干や橋すゞみ
涼しさや先武藏野の流星

韓退之拾酒吟あり。

酒ほかす舟をうらやむ涼み哉

こまがた

此碑では江を哀まぬ螢哉

牛御前

是や皆雨を聞人下すゞみ

橋上休老といふ題に

牛泥む老の齒がみや橋すゞみ

鉾を玉子でたゞくすゞみ哉

海を見て涼む角あり鬼瓦

饒久松肅山

筆をさす御笠やかろき下涼

人の子をめて、

涼しいか寐てつむり剃ゆめ心

藹 讃

大虚涼し布袋の指のゆく所

日枝にむかひ給ふ御神を

十八の明神つねにすゞみ哉

河原にて

曉を牛さえすゞみ車かな

此松にかへす風あり庭すゞみ

(頭書)遊子殘月

勘當の月夜に成し涼み哉

暑 字 行書公にて

むら雨の木賊に通る暑さ哉

旱 饑 露江公

供がたの鞘の暑さや岡の松

自 棄

人に又暑い顔あり端涼み

たが爲ぞ朝起晝寐夕すゞみ

五月十日雷雨、永代鳥の茶店

にやどりして

明石より神鳴晴て鮎の蓋

住吉にて西鶴が矢數譚諸せし

時に後見たのみければ

驥の歩み二萬句の蠅あふぎけり

七十余の老醫まかりて、弟子

子どもこそぞりてなくまゝ、予

に追善の句を乞ける。その老

醫のいまそかりける時、さら

に見しれる人にもあらず、哀

にもおもひよらずして、古來
稀なる年にこそなどいへど、
とかくゆるさざりければ

六尺も力おとしや五月雨

村田忠義が事也。

年々の春秋武江の寺社に廻り
給ふたる靈佛靈神、君を守り
のあとしめて、興廢の御威現

あらたなる中にも、當時の開
帳はさがの御てらと札をうた

れて、官駕邸馬のさかひに暑
をなやます、霍亂虫氣のさは

りもなく蟻のごくにまふてつ
だふ。行程の遠近を辻番にた

づねて

まはらば廻れ振舞水の下向道

祐天和向に申す

夕顔にあはれをかけよ賣名號

晝顔に米搗涼む哀也

故翁の句を繪にかゝせて譜の
ぞむあり。その繪は夕良の花

を書たり。句とたがひ侍るゆ
へ白句を書侍る。

夕顔や一白のこす花の宿

逐三歐陽公賦一

蠅の子の兄に舜なき憎さ哉

讀 讃

蟪蛄の小野とはいはいはじ車百合

(頭書「市中旁」)

子の肩とみつわぐむ也夏旱

魚市涼背

楊貴妃の夜は活たる鯉かな

七月七日靈夢を感じて東湖の

辨才天に詣侍るに

出ぬ茶屋に欺かれても蓮哉

荷切や下手にし切れば葦を角

歌仙貫之の古藁に

冠にも指をそふめり歌の汗

背流亡妻をいたみて

閨女とはこれや此世を夏の海

上下と裸の間を夕すゝみ

ある御方よりあさがほ書たる

扇にさんせよとあり

薜や扇のほねを垣根哉

と書て奉けるにかさねてまた

軍繪かいたる扇にさん望ませ

給ふ。再は申かねて

涼風や與一をまねく女なし

鬼のやうなる法師みちのくへ

くだるとて、道祖神にとがめ

られ、異例して何がしのもと

に介抱せられ、漸生のびて心

よはき文ども送られしかへし

に

辨慶も食養性や瓜島

瓜守や桂の生洲たえてより

越前の人土産をめで、光廣

卿のうたをおもひ合侍り

鯉哉先まなばしを袖で拭

元角田川牛田といふ所にて

いそのかみ清水也けり手前橋

湖舟に酒たうべて

貫之の鮎のすしくふわかれ哉

はなんけの一句を扇に望れて

生の松ばらのうたをよす

木曾路とや涼しき味をしられたり

市原にて

虫はむと朽木の小町干れたり

手にとるも林檎は軸で面白し

百日のあゝら戀しや洗ひ鯉

血鉢に駒のけあげや心てん

乳のめば清水がもとの祭哉

七日

鉢にのる人のきほひも都哉

山王の氏子として

我等迄天下祭や土ぐるま

番附をうるも祭のきほひ哉

松原に田舎祭や晝休み

夏瘦に能因しかも小食也

乞食哉天地を着たる夏衣

高閣裡涼

香霽散犬がねぶつて雲の峰

蝙蝠に宇治のさらしや一曇

蟹をもてなす人に

うき舟の涼しき中へかにの甲

ねてかとへ蓮にさそふ朝朗

大雨大風

吹降の合羽にそよぐ御祓哉



待宵や明日は二見へ道者われ

雲井にかけれの繪に

傘持は月に後るゝすがた也

木母寺に歌の會ありけふの月

名月やこゝ住吉のつくだ嶋

名所月（頭書「縮献上」）

小ぐらから古郷の月や明石瀉

雨（頭書「上州佐野」）

駒とめて笠買獨けふの月

川筋の開屋はいくつけふの月

新月やいつをむかしの男山

水相觀の繪に

我書てよめぬ物有水の月

名月や居酒のまんと頬かぶり

得レ蟹無レ酒

蟹を齧て座敷遣する月み哉

名月や疊のうへに松の影

雨

納屋に何雨吹晴てけふの月

名月や竹を定むるむら雀

夢かとき時宗起て月の色

あつたにて

更くと禰宜の軒や杉の月

紀川　いくせきあり

たつか弓箭に行水やみかの月

所思

いさよひも心づくしや十四日

名月や金くらひ子の雨の友

闇の夜は吉原ばかり月夜哉

月出て座頭傾く小舟かな

人音や月見と明す伏見艸

維摩のさん

山のははは大衆也けり床の月

張良圖

胸中の兵出よ千ゝの月

布袋の月を掬ル繪に

有てなき水の月とや爪はじき

寺

寺の月ぶだう膽は葉にもらん

名月やかどやくまゝに袖几帳

（頭書「木がくれてのみ」）

烏帽子屋はゑぼしきて見よけふの月

閑倚橋

猿道に我とらんとや橋の月

含秀亭

富士に入日を空蟬やけふの月

風雨

雷に桿はなびきそ月見舟

小野川けんぎやうに饒

入月や琵琶を袋におさめけん

三日糧をつゝむといふに

名月や十歩に錢を握りけり

巴江

聲かれて猿の齒白し峯の月

舟中にほていを書て、袋にそへたる杖の桿に似たるを

月見るも杖につなげる小舟哉

琵琶行をよむ

良夜に琵琶を興じて、爰も海

陽の客と思ひなす。酒をそへ
灯を点めて、深更いやましに
村雨の心をはらし、私語の耳
をそばだつめる感あり。かの
十三より學得てし曹保は、福
曲もさぞな、人を泣しむと聞
えつるすさびも、とはりにこ
そと云に、其座閑なる聞て哉
と聲をひそむるものはなく
て、長うなれと枕を投出す。
かく無風情の人、一藝ありや
といへば、

十五から酒をのみ出てけふの月

あさづま舟につづみを入れて月
をみる女の水平に扇かざした
る繪に

おもふ事なげぶしは誰月見舟

所懷 東にて

いはぬ事三ッ心に名有けふの月

母と月見けるに

ねられねば雨元政の十三夜

旅泊

うれしさや江尻で三穗の十三夜

薬研では粉炊^{こがし}おろすか後の月
住の江や夜芝居過て浦の月
白玉に芋を交ばや瀧の月
後の月上^{かみ}の太子の雨夜哉
しかぞすむ茶師は旅ねの十三夜
後の月躍かけたり日傘

十三夜を

やよや月夜は物なき木挽町

間十五夜

雨の夜は
江戸間ふりけは

御番衆は照月を見て駿河舞

平家落足の屏風に

宿なしのとられて行し月見哉

榮ふるひ荷へる人に

名月や鼓ふる人の心世話

名月や人を抱手を膝頭

待乳山

(原本句の右肩に記せり)

こよひ満り棹のふとんにのる鳥

契不^さ達懸

閑の灯に光る座頭や袖の月

一休の狂詠白書を寫して

(頭書「甲申」)

律師沙彌相剃をして月み哉

松前のきみに申送り侍る

こさふかば大根で消さん秋の月
十六宿(夜)は儒者と名乗し姿也
濱藪の穂に出る月を名残かな

同十三夜

笈の菓子古郷寒き月見哉

病中制禁好

橋桁の串海鼠はづすや月の友

新宅吟

汐波をかくへてみばやけふの月

宗因、先月をうるの句をとりて

芋はく凡僧都の二百貫

君がいひけんとは、といひ

すてゝ出たりけんあした

物かはと青豆うりか袖の月

鐘聲客船

名月や御堂の鼓かねて閑

(頭書「遊子」)

いねぶるな松の嵐も江戸の月

鴈鳴や弓弛^{はな}をみれば昏の月

玉津嶋歸望

わかにはみつ更井の月を夜道哉
いざよひや龍眼肉のから衣

上交語上

平家也太平記には月も見ず

吉野の山ぶみせしころ

こよひたれすふく風、とよ

まれし世尊寺に篠分て

頼政の月見所や九月盡

九月廿七日の月を惜

見し月や大かた晴て九月盡

不卜家句合

文月や陰を感じる蚊屋の中

七夕や暮露よび入て笛を聞

星合やいかに瘦地の瓜つくり

雨後

鵲や石をおもしの橋も有

星合や山里持し霧のひま

新居

躰梢かけてかよへや銀河

天川けふのさらしや一しほり

青山邊にて

踊子を馬でいづくへ星は北

侍座

刺鯨も廣間に羽をかはしけり

笹のはに枕つけてやほしむかへ

二星恨む隣のみすめ年十五

かさゝぎや丸太の上に天川

星合や女の手にて歌は見ん

ほしあひや曉になる高灯籠

丸腰の治郎笠とれ星むかへ

比叡にのぼりて

星あひや双林塔の鈴の音

橋と成鳥はいづれ夕がらす

七月朔日饒三肅山子一

かけて待伊豫靡も輕し桐の秋

葛花や角豆も星の玉かづら

小娘の生さきしるしかけ躍

小屋涼し花火の筒のわるゝ音

鶴さばきも逆櫓もやるや花火賣

玉川の水筋、かれたるとし

水汲の曉起やすまふ觸

増上寺晚景

馬老ぬ灯籠使の道しるべ

七夕うたづくしなどいふ草紙

行水に數かくよりも鶯に傘

弄化生

あひろの子乎、といなや天川

棚經よみにまいられし僧の袖

よりおひねりを落しける。か

の授記品の有無價寶珠と説せ

給ふ心をおもひて

衣なる錢ともいざや玉まつり

永代島にあそぶ

遊山火を芦のははけや玉迎

玉まつり門の乞食の親とはん

きふみし人や隣の玉まつり

得三斗酒一(頭書「陌上塵」)

淵明が隣あつめや生身玉

棚經や此あかつきのあかの水

見る人も廻り灯籠に廻りけり

送り火や定家の煙十文字

千之と黄檗にあそぶ

盆前をのがれし山の二人哉
稻づまやきのふは東けふは西

妻におくれて後子にもはなれ

たる人に

いなづまや思ふもいふも紛るゝも
伊勢の鬼見うしなひたる躍哉
身にしむや宵曉の舟じめり

舟興

壹兩が花火間もなき光哉
扇の花火たてたる扈從哉

坡子万三郎を悼て

折釘にかつらや残る秋のせみ
鬼灯のからを見つゝやせみの空

悼ニ齋一

其人の斯さえなし秋の蟬
投られて坊主也けり辻相撲
よき衣の殊^{こと}いやしやすまひ取
ト石やしとゞにぬれて辻相撲
神のため女も賣や相撲札
相撲氣を髪月代の夕かな

山城がまだ鑄ぬ形や鉛西風

遊ニ弘福寺一

木犀や六尺四人唐めかす

中の郷にて

幸清が霧のまがきや昔松

雨 後二句

あまがへる芭蕉にのりてそよぎけり
殊晴て雷朝顔にいさぎよし

薜の日陰まだあり中老女

薜に立かへれとや水の物

(頭書「いせせにかけ松」)

蛛のゐや薄をかけて小松原

種竹三竿

竹の聲許由がひさごまだ青し

つぼみとも見えす露あり庭の萩

長野豊受野をわたりて

角文字やいせの野飼の花薄

岡釣のうしろ姿や秋の暮

芦の穂や蟹をやとひて折もせん

客至

醬油汲小屋の堺や蓼の花

暮薜といふを

朝顔に花なき年の夕哉

花もうし佐野の渡の蓼屋敷

酢を乞あり隣の蓼の花盛

三邊奉納

早稻酒や稻荷よび出す姥がもと

露の間や浅茅原へ客草履

頬摺やおもはぬ人に虫屋迄

野店無ニ看核一

足あぶる亭主にとへば新酒哉

酒買に行か雨夜の鴈孤ッ

浅茅原にて

化野や焼もろこしの骨ばかり

春日法樂

今幾日秋の夜詰をかすが山

四所の宮人夜ごにとのめし
て、戌の刻をかぎりとし侍

る也。

野外夕虫といふ題にて

蜻蛉や狂ひしづまる三日の月

相撲川洪落水接レ天

狼の浮木に乗や秋の水

二挺立の露裊

髪を焼枕つれなし星の露
鶏頭や松にならびの清閑寺

こまひきの題にて

甲斐駒や江戸へくと柿ぶだう
駒曳や岩ふみたてゝ元宮根

みの路に入て 舊本にて

砧きかん孫六屋敷志津屋敷

ある長者のもとにて

中の間にねぬ子幾人さよ砧

和水新宅

さい槌の音を仕まへば砧かな

奥好の殿やうつらんから衣

遠里小野の虫聞にまかりて

霧雨は尾花がものよ朝ぼらけ

井や御幸のあとの肩つくり

あたかのわらべに扇とらする

系に

關守の心ゆるすや栗かます

大和路の女に物いひて

泊瀬女に柿のしぶさを忍びけり

嵯峨遊吟

清瀧や澁柿さはす我心
茸狩や山のあなたに虚勞病

女中の茸がりを

茸狩や鼻の先なる歌がるた

舟中

ない山の富士に並ぶや秋の暮

秋山や駒もゆるがぬ鞍の上

(頭書「岡田高橋之記」)

稻葉見に女待そへすみだ河

秋の空尾上の杉をはなれたり

餘二秋航一

諸鶉駒はまかせぬ臨月かな

松虫に狐を見れば友もなし

柴壺といせをかたりて

故郷も隣長屋かむしの聲

すむ月や髭をたてたる菰

夜過し山

鈴虫や松明先へ荷はせて

山川や梢に毬はありながら

たばこ干や山田の畔の夕哉

二見にて

岩のうへに神風寒しはな薄

長谷越

山畑の芋ほるあとに伏猪かな

川芎の香にながるゝや谷の水

遠州二股川を河舟にて下り待

るに推河脇といふ所、逆水大

切所をこえて

打櫓に鱸はねたり淵の色

一夜前裁といふ事を

御城へは何に入やらをみなへし

切悠亭にて

日盛を御傘と申せ萩に汗

専吟庵

萩薄むすび分ばやササ井

鴨松亭

獅子舞の胸分にすな庭の萩

楓子亭

ねだり込は誰の内儀ぞはぎに鹿

井筒を略したる畫に

いそのかみ竹輪にむすぶ薄かな

田家

庭鳥の卵うみ捨し落穂かな

敷臺に稻ほす窓は手織哉

錢三書流雜波一

芦刈のうらを喰せて砧哉

隣家にもと結こくを

大絃は晒す元結に落る雁

元結のねる間はかなし虫の聲

太郎二郎の貝をとりて

かけ出の貝にもてなす新酒哉

霧香月灯を憐

古寺や澁紙ふまん所だに

駿府御番に旅たち給へる人に

たが上に賤機ごろも木澁桶

同仙石玉英公御加番に錢別

萩すりや傘すかす昔鞍

あふひのうへ(上)の後、花子、喜

太郎

三栗のうはなり打や角被

在原寺にて

僧ワキのしづかにむかふ薄かな

松のはにその火先たけ薄醬油

(此句は松茸の隠題也)

感微和尚に對す

そば打や鶉衣に玉だすき

品川泛鉤

鴈の腹見送る空や舟の上

白雲に聲の遠さよ數は鴈

むすめ喰そめに

鶉啼や赤子の頬を吸時に

順檢にとはす語や百舌の聲

(頭書「曳尾」)

泥龜の鳴に這よる夕哉

錢三少長上京一

うら枯に花の袂や女ぼれ

如是果のこゝろを

二子山二子ひろはん栗のから

尾州淨教寺にて

燕もお寺のつとみかへりうて

宵闇や霧のけしきに鳴海がた

鹿の一聲といふ小うたのきん

に

更がたを誰が御意得て鹿の聲

さほしかや細き聲より此流

木辻にて

門立の袂くはゆる男鹿かな

小原女や紅葉でたゞく鹿の尻

秋葉禪定の時

合羽着て鹿にすがるやあきは道

下山

かし鳥に杖を投たるふもと哉

芭蕉翁風蘭を悼める詞あり、

風蘭一子、孤愁をあはれむ。

芋の子も芭蕉の秋を力かな

めおとむつましくて年頃子な

き事をなげく人に

おもふ葉は思ふ葉にそへ秋葉

二月堂にまいりけるに七日斷

食の僧、堂のかたはらに行ふ

こゑを聞て

日の目見ぬ紙張もてらす柗哉

其五左衛門にあひて

此風情狂言にせよつたの道

産寧坂くだりて

菊紅葉鳥邊野としもなかりけり

戸越山庄

むら柗荏の實をはたく句哉

かつちりて翠簾に掃るゝ艳哉

あさふ山庄

谷へつけ鹿のまたきの艳狩

三條橋上

片腕は都にのこす紅葉哉

ある人の従者に

紅葉にはたが教えける酒のかん

山姫の染から流すもみち哉

菅根

杉の上に馬ぞ見えくる村紅葉

高雄にて

此秋暮文覺我をこそせかし

泊瀬にて

艳見る公家の子達かはつせ山

山行

道役に紅葉はく也さよの山

いせにて

紅葉して朝熊の栢といはれけり

南天やをのがみほどの山のおく

南天の實を包めとや鴈の聲

南天や秋をかまゆる小倉山

うつ山の繪に

(頭書「旅思四句」)

笈の角梢の蔦にしられけり

七十の腰もそらすか鳴子曳

いつしかに稻を干瀬や大井川

山の端をやんまかへすや破れ笠

水郷

唐稻を流るゝ沓や水見舞

富士

笠取よ富士の霧笠時雨笠

朝霧や空飛夢を不二風

背面達磨を畫て

武帝には留守とこたえよ秋の風

旅思 二句

みゝづくの獨笑ひや秋の昏

みゝづくの頭巾は人にぬはせけり

(頭書 本多下總守どの御侍

宴)

召どに馴し子方や花薄

うら枯や馬も餅くふうつの山

後園

いきぬけの庭や鍔招菊の花

旅行

駕籠に濡て山路の菊を三嶋哉

しほらしき道具何ある菊の宿

荷令が従者たんざくほしがる

に

土器の手きはみせばやけふの菊

けふの菊小僧でしるやさらさ好

きくの香や瓶よりあまる水に迄

白鷄の碁石になりぬきくの露

雨重し地に這菊を先折ん

こは誰に雨ののこりの袋菊

素堂、殘菊の會に

此菊に十日の酒の亭主あり

畫菊

きく白く苔は後にかゝれたり

菜苑

菊を切跡まばらにもなかりけり

水泉にくさめ也けり菊艳

病起 千山より菊ヲ見て

大母衣のうしろを押や瓶の菊

三嶋にて重陽

門酒や馬屋の脇のきくを折

宮川のほとりへ酒送せられて

重箱に花なき時の野菊哉

みちとせのもの名におふき

くの芭に、とよみけるにおも

ひよりて

いかで我七百の師走菊にへん

竹苑のやどなきたねをうつし

奉りて花奇なるを

出世者の一もとゆかしつくり菊

翁さび菊の交むに任せたり

時服藏菊にはきくの芭哉

十日菊

観世殿十日の菊をかねてより

女子をねがひてまふけたる人

に

かに屎にうつろふ花の妹哉

十日菊

震宴の残りもがもな菊脛

笠きたる西行の圖に

菊を着てわらぢさながら芳しや

袖の浦といふ貝づくしに

白菊を貝の實にせん袖の浦

那波屋九郎左衛門がさかつき也。

御邊宮の良材ども拜奉りて

大工達の久しき顔や神の秋

御齋にまふて奉りて

御穂を取て髪あるまねのかざし哉

内宮 法體の御所なるに

身の秋や赤子もまいる神路山

外宮

日は晴て古殿は霧のかぢみ哉

いづれもわが身はどかりあるゆへに申侍る也。

太くや小判ならべて菊の花

雲津川にて

花すゝき祭主の興を送りけり

冠里公御わたまし祝奉て

初鴈や臺は場はれて百足持

周信が瓢の畫に

白露も一升入のめぐみ哉

平家の衰(衰)を語るに

かへり来て福原淋しうづら立

元祿辛未のとし、大山梨島へ

参詣

品川 肥後前番所し之。

品河もつれにめづらし鴈の聲

とつか

稻塚の戸塚につゞく田守哉

藤澤

宿とりて東を問やくれの月

いせ原

よこ雲や離くの蕎麥畠

御向松にて

生栗を握つめたる山路哉

大山

腰押やかゝる岩根の下もみぢ

石藏寺對し僧

手に提し茶瓶やさめて苔の露

二間茶屋にて

白馬の尾髪吹とるすゝき哉

由井がはま

朝霧に一の鳥居や波のおと

雪の下にやどりて

砧うつ宿の庭子や茶の給仕

鎌岡左の古櫓のもとにて

有し代の供奉の扇やちる銀杏

横几追悼

一鉢を手向にとるや新粧

酒もる詞を切題にして各一字を採る中に間を

あいせばや夜寒さこそ空寐入

白晝雁

片足はやつしゝ也小田の鴈

秋のくれ祖父おはぢのふぐり見てのみぞ

白扇倒懸東海天といへる句つ

ね此いたゞきに對して手にに

ざりたる心ちせらるゝこのあ

した雲霧立おほひて山の半腹

より見わたされたるを、要かなみよりすそといはんも後句なりと

て

白雲の西に行衛や普賢富士

未曉吟

鐘つきよ階子に立てみる菊は

洞房の茶屋半兄生前笛を好けるがうせたるを悼て

とぶらへや笛の爲には塗足履

悼三朝聖一

此人に二百十日はあれずして

吉田氏

唐櫃も糸をたれたる手向哉

芭蕉翁十三回

辰霜や鳳尾の印のそれよりは

寶永三戌十一月廿二日、妙身童女を葬りて

霜の鶴土にふとんも被されず

神無月ふくら雀ぞ先寒き

高砂や禰宜の湯治の神無月

玉津嶋にて

御留居に申置也かみな月

高野にて 十月三日

卵塔の花表やげにも神無月

驚からず片日かはりやむら時雨

あれきけと時雨來る夜の鐘の聲

時雨ゝや葱臺の片柳

芭蕉翁三回

しぐるゝや此も舟路を墓參

帆かけ舟あれや堅田の冬げしき

遊二金開寺一

八疊の楠の板間をもるしぐれ

蓑を着て驚こそ進め夕しぐれ

大和めぐりせし頃

むら時雨三輪の近道たづねけり

芭蕉翁病床

吹井より鶴をまねかん時雨哉

釣柿の夕日ぞかはる北しぐれ

飼猿の引窓つたふしぐれ哉

時雨くる酔やのこりて村霽

しぐれもつ雲の間にあへ酒

の間とたはぶれし人にこ

たえし也。

富麻寺おくのゐんにて
小夜時雨人を身にする山居哉

富院に雲寶什物さま／＼多し。

中にも小松どの、法然上人へ

まいらせられし松かげの硯あ

り。箱の上に馬蹄とかきて硯

のうみの形容とす。
松陰の硯に息をしぐれ哉

世尊寺よりにしかうの瀬を見

やりて

三尺の身を西河のしぐれ哉

本多總州公に侍座しける夜む

ら雨とひとしくかうほりの鳴

たるを發句せよ、と仰られし
に

蝙蝠や柱を捻たる一しぐれ

守山の子にもりを茸時雨哉

三か月のおぐらき程に玄猪哉

東には祇園清水とうたへば

楊弓に名のる女やかみな月

神の旅酒匂は橋と成にけり

家々の留守居よる也大社

大和めぐりし頃

たかとり城の寒さやよしの山

使者獨書院へ通るさむさ哉

井波門主應心院殿ありそう

みなみ山の二集をらみ給ふ

に御所望

風や沖より寒き山のきれ

何がしの家にて御流頂戴の

とぶきに

紅葉の下部もあらんものこ哉

玄猪とや祖父のうたふ枝折萩

くろの者代々のるの子に歸花

つみ綿に兎の耳を引たてよ

大町新宅

水仙や鋳ついでの小鵲臺

水仙に猶分行や星月夜

風に氷るけしきや狐の尾

捨人やあたゝかさうに冬野行

父が醫師なれば戯に

鮑汁に又本艸の咄かな

河豚あらふ水のにこりや下河原

何よけん藻魚はた白冬肴

表我十九日から見へぬ也

大黒のうせたる家にて

酔さめて大黒出ん夕ゑびす

まな板に小判投げり夷講

糸屋十右衛門宅にて

嵯峨山や都は酒の夜かう

人妻は大根ばかりを鮑汁

打鑓に鮑もゑびすの笑哉

生煮をふぐといふ也ふぐと汁

世中に舅をよぶやふぐと汁

日本の風呂吹といへ比叡山

ふけるの浦打めぐりて

鮎ひとつとらへかねたる網引哉

幻住菴にて

蕪水の名どころならば冬籠

蕪汁や霜のふりはも今朝は又

宗隆尼みまかり給ふ年、千那

にぐして堅田へ行とて

婆に逢にかゝる命やせたの霜

蟹の刈蕪おかしや見るめなき

祕藏がる鍋のかるさや筑摩汁

鮎汁や祝言のこす能戻り

かへり花それにも敷ん庭切

柳寒く弓は昔の憲清也

靈山のみにて

かまきりの尋常に死ぬ枯野哉

生嶋新五郎上京に

鉢の木の扇笑ふなかへり花

野の宮のやぶかげにわびしき

槌のおとしけるに

鉄鍛冶に隠者尋ん烟の霜

澁にて

初霜に何とおよるぞ舟の中

しばらくもやさし枯木の夕附日

園城寺にて

からびたる三井の二王や冬木立

風や勢田の小橋の塵も渦

芭蕉翁を見送りて

冬枯をきみが首途や花曇

石菖の露もかれ葉や水の霜

加生のつまの心づかひを得て

縫かゝる紙子にいはん嵯峨の冬

むかしせし戀の重荷や紙子夜着

起出て事しげき身や足袋頭巾

寐心やこたつぶとんのさめぬ巾

紙子着てぐもり頭巾もみそじ哉

長途狂僧吟

紙子きて渡る潮も有大井川

日ばかりを氣まゝ頭巾の浮世哉

山鳥のねかぬる壁に月寒し

何となく冬夜隣を聞けけり

此木戸や鎖のさゝれて冬の月

閑さや二冬なれて京の夜

新宅 二句

竹の場の小庭成べし炭俵

鼠にもやがてなじまん冬籠

遠水三十五日に

おほふ哉さまさぬ袖を納豆汁

霜月朔日の例を

諸人や嵐芝居を冬籠

好柳が市店

人を見ん冬のはしるも夕涼

顔みせや曉いさむ下邳の橋

朝叟老父七十の賀に

白河の波をかゝばや桐火桶

播州たち野に一僧のすきあ

り。六十年の榮花を誹諧にき

はめて終りを取侍る。とに我

をしたへるよし聞え侍るに、

いたみ

栗飯の焦て匂ふや霜の聲
法雲寺老僧春色と聞へた
り。

源氏もや季吟の家の夷講
さびしさは獨我住ほいろ哉
蝶の手に匂のこるや霜の菊
捨人の爲の切とて火打哉
髪かみの霜木賊のひと夜枯にけり
落のとう其根うへをけ冬構

鮑のうつせ貝を盃にして、都
鳥と名付たるによせて

炭賣は炭こそはかれみやこ鳥

柯求老人の手向

山茶花や獨もれたるお盛物
海へ降あられや雲に浪のおと
みがゝれて木賊に消るあられ哉

山行

山犬を馬が嗅出す霜夜かな
みぞれにも身はかまへたり池の鷺
寒声さうせい盡はく
あな寒しかくれ家いそげ霜の蟹
氷にも盡とちよ鷺の中

住吉にて

蘆の葉を手より流すや冬の海

周防どのは才ある人にて、政
事行ふに一生非なし。ひな
きをめてい、板くらどのと申
とかや。この中より、やけた
る錢をひろひ出て

火燵から青砥が錢を拾けり

片手打落したる火鉢を幸のも
のかなとて

忠度と灰にかゝれし火鉢かな

名もたゞのりといふべし。こ
れに對して

炭とりに鏡のぬけし手櫛哉

三年成就の園に入

爐開や汝をよぶは金の事

炭爐 三句

炭やきの獨ぞあらん釜のきは
炭がまや鈴木龜井が軒の松
炭うりや朧の清水鼻を見る
炭竈や煙をぬけば猿の聲
かたすみも其木葉より發りけり
うづみ火の南をきけやきりくす

埋火に芋やく人は薰す

炭屑にいやしからざる木のは哉
とてもならかの一車とのゐ炭

寒蟬爐をめぐる。

憎まれてながらふる人冬の蟬
口切や袴のひだに線蘿せんら葡萄

梅津某秋田へ發駕を賴壁の宿

まで送侍て

こゝに吞座敷しつらへ網代守

閑居安慰

へら鶯の爐を残さぬや灰せゝり

山中 高客

鈴卷の松にかゝるや三穗の海

並藏はひゞきの灘や寒作り

十石は鶯につく也れうあん寺

冬川や筏のすはる艸の原

閑倚橋

うすら氷や鏝長なる橋柱

瀧幅や氷の中にゐざり松

鯉一ッあじろの夜のきほひ哉

煮凍や簀子の竹のうす緑

對友

内藏の古酒をねだるや室の梅

市岡の伶人に

宮薬屋はてしなれば矢倉賣

揚屋の外邊に鳥うるもの鴨の

毛を引を見て

鴨の毛や鶯の袋の道ふさげ

心をや筈にゆらるゝうら千鳥

浦衝さこそ明石も大神鳴

網代屋にとこてん屋の古簾

塩簾子や投てたゆたふ礮衝

よき日和に月のけしきやむら衛

妹が手は鼠の足かさよちどり

薩埵山にて

汐波の猪首も波のかもめ哉

珍しき鷹わたらぬか對馬舟

京なる人に案内して

るぼしきた船頭はなしみやこ鳥

瀬口やおもひ捨ても池の鶯

人丸講 月本に

沖の帆も十はたみそや濱千鳥

兩國橋上 二句

曉の筑波にたつや寒念佛

寒念佛橋をこゆれば跡からも

酒飯の飲酒はいかに寒念佛

去來家にて

千鳥たつ加茂川こえて鉢扣

ことぐね覺はやらじ鉢扣

南都にあそべる時

寒聲や南大門の水の月

ひたち帯のならばしなどおも

ひよせ侍りて

たれとたが縁組すんで里神樂

夜神樂や鼻息白き面の内

雪買に雪を沽ばや鶴の雪

清水修行にとまりて

むかしたれ雪の舞臺の日の氣色

知恩院町に宿とりて

初雪にまくすがはらの妻かな

大津まつもとにて

雪の日や船頭どのゝ顔の色
ひらかたの宿にて

馬かたに貧きはなし雪の宿

寒山のさん

ねる恩に門の雪はく乞食哉

西運寺興行

初雪に人ものぼるか伏見舟

我雪とおもへば輕し笠のうへ

はつ雪や赤子に見する朝朗

はつ雪や雀の扶持の小土器

門といふ字を得て

馬に炭さこそはたけ雪の門

矮屋

窓錢のうき世を咄すゆき見哉

官城御普請成就して諸家御褒

美給はりける頃

陪臣は朱買臣也ゆきの袖

芭蕉空庵をとひて

衰老は簾もあげず菫の雪

門の雪檜ありやととはれけり

山居の僧に

雪を波て猿が茶を煮けり太山寺

かも川に一むれとよみたるを

釋迦とよぶ頭も雪の黒木かな

ちづれがみなる女のあだ名
にや。いとけうざめたり。

酔吟

雪うちややり手をかへす小忌衣

望^み叡山

薄雪や大の字枯る山の草

戸障子のおとは雪也松の聲

かはかうや竹田へ歸るゆきの暮

遊女土佐をむかへたる人にう

とく成て

黒塚の客あしらひや閑の雪

立徘徊

はつ雪や内にゐさうな人は誰

めづらしい物が降ます垣ねかな

鴨川の鴨を鐵輪に雪見かな

或御方より雪見にむかへさせ

給ふ馬上吟

初雪に牧やえられて無事なやつ

桶の銅壺四間に一間とかや。

万客の唇をうるほせば

はつ雪や湯のみ所の大銅壺

もとすみだ川と云わたりにて

半衿の洲崎もありや雪の松

人も來ぬ夜の獨酌

初雪や十に成子の酒のかん

軍兵を團炭でまつや雪礫

松の雪薦につらゝのさがりけり

前といふ字で雪の句

觀覽の人になりつゝけふの雪

初雪は盆にもるべきながめ哉

出口にて

きぬぐゝに犬を拂ふや袖の雪

すてゝあるといふ小歌を句の

題にして

おもはめや捨てあるかは雪の宿

市中閑

初雪や門に橋ある夕間ぐれ

不分當春作病夫

酒ゆへと病を悟るしはす哉

桶月十日西吟大坂へのぼるに

いそがしや足袋賣に逢うつの山

新堰にて食くふやうに師走哉

餅花や灯たてゝ壁の影

餅と屁と宿はきゝわく事ぞなき

やりくれて又や狹延年のくれ

書出しを何としはすの巻柱

座右銘

行年や壁に耻たる覺書

乳母ふえてしがも美女なし年忘

鰯荷ふ中間殿にかくれけり

のり物の中に眠沈て

年忘し劉伯倫はおぶはれて

震威流火しづまりて

妹が子や薑とけて餅の番

煤掃てねた夜は女房めづらしや

京に春をむかゆる年おはらの

賤に問事あり。

行幸の牛洗ひけり年の暮

臘鬼五ツの子を産り。焚中に

やしなはれて、若婢にかけら

ん事をいはひて

年をとる鬼に祝へ熬ぬ豆

すゝはらひ暫しと侘て世捨藏

童にはしころ頭巾や煤はらひ
忠信が芳野仕廻やすゝはらひ
有がたき親の情氣も師走哉

閑窓に羽帚をめでゝ

煤ごもりつもれば人の陳皮哉

鼻を掃孔雀の玉や煤ごもり

御煤ノ翁ハ竹取。

千山宅とし忘に

割すそや八乙女神樂男より

揚屋に酔房して

戀の年差紙籠をさらへけり

年の市たれをよぶらん羽織どの

小傾城行てなぶらんとしの昏

山陵の螢分をまはすしはす哉

女子の抱衾しける家にきげん

とりて

餅の粉や花雪うつる神の笑

行露公万句御興行巻軸

萬代のをあげけり神樂帳

市 隅

弱法師我門ゆるせ餅の札

鳩部屋の夕日しづけし年の昏

梟よ松なき市の夕あらし

自 悔 三十

子をもたば幾ッなるべき年の昏

大津驛

千觀の馬もせはしやとしの暮

雪 窓

損料の史記を師走の螢かな

年の潮やひらめのむ鵜の物思

行年や貉評定夜明迄

元集

拾遺

晋子一世の奇句は、
 ことごとく五元につ
 くせりといへども、
 興ある自畫に戲言の
 句をなし、あるは一
 斗百篇の醉吟、又は
 柳巷の曉、旅店の昏、
 みづからも覺ずして
 もれたるなど、人々
 はこれをもてはやし
 て、箱にひめ、物に
 といめ、吾家この青
 氈とよぶを、これか
 れあまねくさがしも
 とめて、編てまた一
 書となすのみ。

晋子一世の奇句はことごとく五元は
 けいせりといへども興ある自畫
 戲言の句をなしあるは一斗百篇の
 醉吟又ハ柳巷の曉旅店の昏
 みづからも覺ずしてもれたるなど
 人々はこれをもてはやして箱にひめ
 物にといめ吾家この青氈とよぶを
 これあまねくさがしとめて編て
 また一書となすのみ

五元集拾遺

春之部

日の春をさすがに鶴の歩み哉
年立や家中の禮は星月夜
松かざり伊勢が家かふ人は誰

神明町に居をしめて

行合の松もかたそぎかざり竹
鐘ひとつ賣れぬ日はなし江戸の春
鶴さもあれ顔淵生て千々の春
元日や月見ぬ人の橋の音
はま弓や當時紅裏四天王
元日の炭うり十の指黒し

手ニ握レ蘭ヲ口ニ含レ雞ノ舌ヲ

ゆづり葉や口にくみて筆はじめ
師走の分野^{サマ}是かや春の物狂ひ

高砂住の江の松を、古今万葉

のためしにひかれしより、散

うせずして連歌に傳ふ。しか
るに此松は枝葉百間にあま
りて、諸木にことなる氣色、尤
はいかいなるべし。

蓬萊の松にたてばや曾根の松
庭竈牛も雜煮を居りけり

題黄金

目には見ず一万枚を御代の春
若水に鏝のおどる涼しさよ

春王正月老

生死のむかし男ぞと水祝ひ
明る夜のほのかにうれし娘が君

初夢や額にあつる扇子より
世の中の榮螺も鼻をあけの春

参宮の四判は來たり亥子の間

蓬萊の讀

嶋そよる三の書院のかじやくまで

福祿壽の讀

長き日や年のかしらの影法師

寶引の讀

保昌がちから引なり胴ふぐり

松かさやまはさばこまにまはるべく

花さかば告よ尾上の春おろし

春の水かろく能書の手をはしらす

若菜

傘持はつくばひなれし若菜哉

菜つみ近し白魚を吉野川に放て見^{まよ}う

さわらびの七種打は寒からん

うかれ雀妻よぶ里の朝若菜

大根の讀

兵のひかへてふたり子の日哉

惠美須紙かけ取帳の三枚目

此句は陸月十一日内田市左
衛門が家にて、帳のおもて

にかゝれしと也。

梅柳

さす枝のゆきとどかぬや繪馬の梅

旅立ける人に

古郷へ梅おり入れよかたな箱

白主改名 詞書うせてなし

白黒の間の障子やむめと星

梅にはうとき句帳とり

此句五文字ちぎれて見へず

惜べし。

小袖着せて俳句へむめが妻

宿の梅般いかばかり青かつし

芭蕉翁百ヶ日懷舊

墨の梅春やむかしのむかし哉

詞書略

三日月の命あやなし闇の梅

詞書有 今略

焼のこる琴に恨の柳かな

曲れるを曲てまがらぬ柳哉

あるまんす所持の掛物自畫讃

風なりに青い雨ふる柳かな

山更上京

貫さしもわがねて輕き柳哉

傾城の讃

青柳の額の櫛や三ヶの月

鶯

鶯に長刀かゝるなげし哉

うぐひすの曉寒しきりふす

鶯がねぐら笛吹おこせ笹聴

うぐひすや鼠ちり行閑のひま

あらし座にて

鶯の子は子なりけり三右衛門

霞消て富士をはだかに雪肥たり

杉起て鳥を見する雪間哉

すべらずに筏さす見よ雪の水

こまの戀

(頭書「近憐戀」)

京町の猫かよひけり揚屋丁

(頭書「寄竹戀」)

埋られたをのが涙やまだら竹

(頭書「幼戀」)

はゞきゞの百日なき子に別れ哉

(頭書「寄寺戀」)

柏木の柳もそれかあかり猫

(頭書「思他戀」)

飯くへば君が方へと訴訟猫

(頭書「疑戀」)

花の夢胡蝶に似たり辰之介

人にこしやうの粉をふりかけ
られて

耳ふつてくさめもあへず鳴音哉

吉原の初午

初午や賽錢よみは芝居から

初午に寺のぼりの例をふたり

の御子達に祝願いたしけ。

いの字より習ひそめてやいなり山

山の端に乙鳥をかへす入日かな

川燕ササ纏さす邪魔と見ゆる哉

歸る鴈米つきも古郷やおもふ

授記品無有魔事

くもりしがふらで彼岸の夕日影

不生不滅の心を

海棠の躰を悟れねはん像

伶人の門なつかしや春の聲

世の中は何かさかしき雉子の聲

惜春

梅ちるやこれを簀にせん鳳巾（うづの）
かつしかや江戸をはなれぬ風巾

支考が遠遊のころさし有けるに

白川の關に見返れいかのぼり

白魚露命

月と泣夜生雪魚の曬闇
白魚の色かはるもの川げしき

畫譜

浦嶋がたよりの春か鶴の聲
引かへて燕をはたのに春の駒
駒とめて雪見る僧に蔭のたう
すこゝと摘やつますやつくし
泥龜の腕とおもへば土わさび
燕にすさめられてや庭の桃

東潮留守見舞

出替りや人置世話も連衆から
やぶ入やはやいにろくなつらはなし

鶉合

炭喰の聲だにたゝぬねらひ哉
毛衣に腹黒き名を雪けり
割ッて入るくるみ花冠も簀手哉
老鳥のけふ若やぎぬ固本丹
勝足をひたさば關の清水かな

汐干

貝つるや白洲の末の流れ松
貝にて貝をむき侍るを

あさり貝むかしの劔うらさびぬ
藤濁や塩瀬によするふくさ貝
子安貝二見の浦を産湯かな
鐵槌にわれから羸螺（かしの）のからみ哉
へなたりやかつぎ上げしは水の粟
海松ふさや浪のかけたるほらの貝
すだれ貝雪の高濱見し人か
われからと雀はすじめからす貝
江嶋や旦那跡から汐干貝

雛

かつらぎの神はいづれぞ夜の雛
いもうとのもとにて

世忘れに我酒かはん姪が雛
上座ほど雛のすがたの新なり
紙雛のさうくしさよ立すがた

花

猿の寄る酒屋きはめて櫻かな
さくら狩けふは目黒のしるべせよ
口びるを魚に吸るゝ櫻哉
これはくんと斗散も櫻哉
京中へ地主のさくらや飛胡蝶

勢田の春望

山櫻身を泣うたの捨子かな
墨染に鯛彼さくらいつかこちけん
山櫻鏡こひしき僧あらん
浦人の花をもらふとて

散時を斗に買む磯さくら
土取の車に添ふややま櫻
鐘立かけし花の陰に奴の眠れる聲に

陳な手の鐘持さむし山さくら
花ひとつ袂に御乳の手出し哉

大佛膝うつむらむ花の雪

泥坊や花のかけにてふまれたり
徳利狂人いたはしや花ゆへにこそ

庚申の雨といふ題にて

此降を人が延さる花見かな

讀莊子

彼是は嵐雪の偽華のうそ
花鳥もうづらとならむ願哉

かんざしやちり行花のおもしにも
花下けてやり手がひとり寺参

神力品現大神力

法の花ちるや高座をたゝく音

憶芭蕉翁

月花や洛陽の寺社残りなく

代 樵

彫^レ笛縫^レ簪^レ花に晴せん浮世哉

屋形舟花見ぬ女中出にけり

湖春をいたみて

泣てよむ短冊もあり花は夢
名さかりや作戀五郎花さだめ

榎 島

花風や天女負れて歩渡り

寒食二句

寒食や竈下に猫の目を怪しむ
今案するに寒食の家には自身番

畫 讃

藤の花これまで顯れいで蛸なり

山吹は黄玉青玉露ぞうき

きりしまに豆腐を切て捨ばやな

柴舟の里は茶摘の水けぶり

ある人の子の名を聞て

ことはりや養ひ子なら蜂之介

竹に蜂の巢かけし繪に

なよ竹のさゝら三八宿とこそ

何必逃杯走似雲 此侍大酒盛

と見へたり

此蛇をたばこで逃すけぶり哉

ねぶる蝶夜るゝ何をする事ぞ

俗にいふうぶめなるべしよぶこ鳥

三月歳

嵩に乗て春を送るに白雲や

夏之部

寄廿己

白禿もなをる斗どころもがへ
法舂もしまの下着や更衣

ぬがでやは手観音衣がへ

東叡山院

僧正の青きひとへや若楓

今日にかはる淨瑠璃殿の青簾

時 鳥

ほととぎす二聲めには出馬哉

あの聲で蛭くらふかほととぎす

音を守る夜寺に鬼なし子規

山田市之丞

ちつくと歸すつゝみや郭公

観音で耳をほらせてほととぎす

我句人しらす我を啼ものは杜宇

鉦かんゝ驚破時鳥艸の戸に

あれくゝと鰯まらはづれてほとゝぎす
ほとゝぎす家隆のうそやきりくゝす

明がたに鳴すてし一聲を

郭公 中入までのはせをかな
さもこそは木鬼わらへほとゝぎす
菰寺うこぎが奥をほとゝぎす
艸の戸や犬に初音を隠者鳥
ほとゝぎす雲も輪になる浦は哉

鰯磨にて

鰯

たのみなき夢のみ見けるに

うたゝねのゆめにみへたる鰯哉
妻鰯の卵の中のめちか哉
人のもとにて

木賀

名所は海を見ずして鰯哉

丹羽左京かうのとのゝゆゝし

かりける参動を

黒牡丹ねるやねりその大鳥毛

むら雨や驪山を名にしふかみ草
須磨の山うしろに何をかこ鳥
蟾をふんで夜卵の花を憎けり

淺野家の義士等をいたむ

おもだかの鎧を引也かきつばた

伏見の何某に

杜若女せつたのかたしあり
傾城の夏書やさしやかりの宿
けしの花朝精進の凋れかな
散り際は風もたのまじけしの花
芥子ばたけ花ちる跡の須彌いくつ

上行寺

灌佛や墓にむかへる獨言
紙合羽からしやうき世夏念佛

岩翁亭題送蟹

みじか夜や隣へはこぶ蟹の足
短夜や朝日まつ間の納屋の聲
ある人の別墅にて

内川や鳩のうき巢になく蛙
枇杷の葉やとれば角なき蝸牛

秋しらぬしげりもにくし烏麥
馬士起て馬をたづぬる麥野哉
麥にかなし薄に月を見ん迄の秋
能化堂麥つく僧を氣色哉
壁の麥薺に年を笑ふとかや

豐年

ぬか味噌に年を語るむ瓜茄子
干瓜やおしろいしても黒き顔
祝産育

たかうなの皮に隣緒つゝみけり

大町亭法會 調書略

法のため箱羹皿もかたみかな

しなびたる法師の梅干けるを

見て

梅いくつ闕伽の折敷に玉あられ

壬二集

さみだれと五月きぬれば名をかへ
ていかにひまなき雨とおもへば

さみだれの名も心せよ節句前
なよ竹の末葉のこして紙のぼり

かぶと取出すを見て

ものゝふの戦甲や庫のうち
粽かはん驛にとめて鈴のぼり
戦網沖には幾つ帆かけ舟
戦立長者の夢や黒牡丹

畫譜

标ゆふはさみや芦の葉分蟹
きる手元ふるひ見へけり花あやめ
根合や御池にひたす花篋

廻文

けさたんとこのめや菖の富田酒

千田亭新宅雪舟の繪に

隅に巢を鷺こそねらへ五月雨
さみだれにやがて吉野を出ぬべし
三味線や寝衣にくるむ五月雨
燕もかはく色なしさつきあめ

題江戸八景

住べくはすまば深川の夜の雨五月
さみだれや湯の樋外山にけぶりけり
五月雨や君の心のかくれ笠

江の島

微雨の窟座頭一曲聞へ給へ
何を音にすぼん鳴らむ五月雨闇

(五月雨闇「恐くは」五月闇」
の誤記ならん)

傾廊

八兵衛やなかざなるまい虎が雨
旅人をあはれみて

舞坂や闇の五月のめくら馬

腰越

篠すがき慰斗を敷療の五月かな

自愧

夜あるきを母寐ざりけるくゐな哉
水鶏鳴く夜半に遊行のつとめかな

和古詩

琴を焼て水鶏を煮る夜酒淋し

いらこの杜國、例ならでうせ

けるよしを、越人より申聞へ
ける。翁にもむつまじくて、
鷹ひとつ見つけてうれし、と
迄たづねあはれける昔をおも

ひて

羽ぬけ鳥鳴音ばかりぞいらこ崎

引舟の讀

夏艸に牖でかるたをそろへけり

夏川に藏より仕出す簀子かな

宇治にて

柴舟にこがれてとまる螢かな

艸の戸に我は驚くふ螢哉
蠹しらみ窓の螢にかたる也

若竹や鞭にわがぬる箱根山

田植まで水茶屋するか角田川

合羽着て友となるべき田うへ哉

早乙女のごれぬ顔は朝ばかり

摺鉢の早苗穂に出る秋こそあらめ

會盟

交りのさめて亦よし夏料理

手にかはく藁摺小木の雪哉

龍前栽

隣官士迎客の興をまうけ侍る
と聞ゆ。いさゝかなる楽園を

とゝのへて、庭前裁と名付、
手籠に雨の竿をいとはず。そ
の題をこゝにおにとりし侍る
句に

海松和布をや蜃の腰簀青角豆

望海觀遊

海松の香や汐こす風の磯馴松
鎌倉の濱出を

海松ふさや貝取出双を蜃にかる

止波浦にて

地引すと蜃のまに／＼暮の汐

遠浦の獵船押送りして此橋の

下に入。

帆をかぶる鯛のさはぎや薰る風

舟興

更るほど四ツ手のいな光かな
朝日に七里は出たり名こや鮓
石の枕に鮓やありける今の茶屋
岩根こす鞋に鱗あり走鱗

遊女小むらさきをかゝせて讀
望れしに

藻のはなや繪に畫分てさそふ水
藻の花や海老越す袖にさゞれ石
蔭の臺にと思ふもかなし深草寺
夏木立哉池上の破風五寸

建長寺無^レ詩俗二了人^ヲ

爰に詩なし我に俗なし夏木立
谷木の鬼なおそれそともし笛

午の年午の月午の日午の時う

けに入る。

競馬埒に入る身のいさみ哉

日待醉しられてみな遊ちりた
る跡に、ひとり燈火をかゝけ

たる難有さよ。

いつの間にお行ひとりぞ夏の月

雪に入る月やしろりと富士の山

夏の月蚊を疵にして五百兩

市の假屋のいぶせきに

杏つくり藁打つ宵の蚊遣哉

夜讀書

蚊を打つや枕にしたる本の重

申の日とて蚊屋まいたり。

夜早ねん紙帳に風を入れる音
蚊は名のりけり蚤はぬす人のゆかり

酔て忘

宵の蚊も枕をわたる八聲かな

宗長の句をとりて

橘の一ツ二ツは蚊もせゝれ
むかし匂ふ花さへ實さへ陳皮さへ

蚊遣り火に夕顔白し橙は

松賀秋航岩城へ趣に初宿千住

とかや聞へければ

蚊遣り火に挟箱から團扇哉

佛骨表

しばらくは蠅を打けり韓退之

射者^ハ中^ニ突^ル者^ハ勝^ツ

蠅打よいつれにあたる點ごゝろ

信濃へ参らるゝ人眼をせらる

る能に

梁の蠅を送らむ馬の上

蠅なくば一華折ん夏の菊

土さへかけてる日にも

蠅追ふに妹忘れめや瓜作り
母の日や又泣いだす眞桑瓜
あたまから蛸に成けり六皮半
ならはしの鹽茶のみけり瓜の後

瓜の一花 文はこゝに略す

此花に誰あやまつて瓜持參

淺草川道遊

富士行や網代に火なき夜の小屋
白雪に黒き若衆やふじ詣
はれてゆ又疊りゆふじ日記

順禮のよる木のもとやとこてん

氷室山里葱の葉白し日かげ艸

不_レ毒_三百姓_一青腹_ノとは文選の
詞也

百姓のしほる油や一夜酒

惻_レ農_ヲ

燒鐺の背中にあつし田草取
紅粉買や朝見し花を夕日影
晝がぼや猫の糸目になる思ひ

薺に鳴くや六月ほとゝぎす

百合の花折られぬ先にうつむきぬ

白露を石菖にもつ價哉

三藏といひけるかたひのもの、
つゞれたる袋より俳諧の歌仙
取出して、點額はしきよしを
申てしきりぬ。其巻の前書に、

爰にいやしき土の車の林のか
げに身をかなしめるありと書
り。いかなる者のなれるはて
にか有けむ、かの巻の奥に申
遣しける。

あまさかる 非人貴し麻蓬

一品の宿坊にて

日蓮よ木ずゑに蟬の鳴く時は

空蟬に吉原ものゝ訴訟かな

木戸番をあはれむ

蟬を聞け一日鳴て夜の露

入湯の人木賀をかたりしに

蟬の聲ましらもあつき梢哉

綴子を懷紙の表紙にして點取
におこせければ

飯櫃にかけもたらぬか蟬の衣

視_レ彼_レ蟬_ヲ貧者に衣をぬぐ事を

紙園殿のかり屋しつらふを

杉の葉も青水無月の御旅哉

拜天王之御旅所

里の子の夜宮にいさむ鼓かな

茂叔詣

傘に蝶蓮の立葉に蛙かな

香一爐蓮に錢を包みけり

手に蓮膠にしまぬ匂ひ哉

惠遠法師は法花の筆受たりと
いへども、唐山の交りをゆる
さざりけるとかや。

玉あらば爰で筆とれ白蓮社

泥坊の影さへ水の蓮かな

蓮の葉の赤_{アサギ}蟬もかゝる暑哉

蟬かけの欄干暑し星は北

〔欄干〕恐くは〔欄干〕の誤記
ならん

貞 遺拾集元五

冠里公、備中松山初入の時

川と暑や浦の苦屋の軸うつり
小女の帯にくるまるあつさかな

傳九郎が持し團扇に

朝比奈の樂屋へ入し暑哉

宗竹のもとへはかたより文參

りたり。送りものやさしかりけ
ればぬしにかはりて申侍る。

生の松いかに忘れむ汗拭ひ
死の海を汗のうを寐や夢中人

山田悦亭にて

汗濃さよ衣の背縫のゆがみなり
身からむ一重羽織も浮世かな
何と羽織縮緬は重し紗は輕し

小町の讀

腰かけて休むなるべき大うちわ
かはほりの物かきちらす羽色哉
水の粉に風の垣なる扇かな
うすものゝ風情日にはる團扇哉

所見

藏か家か星か川邊の涼かな

翁かの文に都のすゞみ過て又
とち風になりともまかせてな
どゝ聞へけるをといめて

丈山の渡らぬあとを涼みかな
夕薬師すゞしき風の誓哉
涼舟泥ぬり合し游かな

少年を舟に供して不死の看を
とゝのへたる

此舟に老たるはなし夕すゞみ

布袋の讀

寐たうちを子ども起すな夕涼

祇公日次の題をとりあはせて

河簀垣徳利もひたす流かな

芝物のすゞしきこなたの巻を見ておもふ

軒合に猫よく寐たり下すゞみ
夕すゞみよくぞ男に生れけり

此句をいづれの集にか他人の
句にせり。予晋子の書れし白
晝讀を見たり。

抱籠や妾かゝえてきのふけふ

曲水の旅宿に湖水を思ひ出し
て

漣やあふみ表をたかむしろ

晝よりいねて

うたゝねやかぶりつめたる麻頭巾

夏酔や曉ごとの柄杓水

井にかみあらふ賤の女はおも

ひもかけぬつやなり。

顔あげよ清水をながす髪の長

露沾公能興行

日にやけて酒のみけるか清水鬼

左右に立わかりて、清り濁れ

りとあらそふ心を、知る人ぞ

汲得侍るべきなれば、松かげ

に下涼せし我に判談をせよと

いはれて、紅の水の底をたゞ

し侍る。

此論は一荷になへ氷水

世にあり乍て西行の跡なつか

しままゝに

獨すむ友よ臍の糯雪清水

夕立や法華かけ込あみだ堂

灸すへて夕だつ雲のあゆみ哉

烟雨村

夕立や洗ひ分たる土の色
ゆふだちやきのふの坂をとらば瀧

雨中吟

白雨に獨活の葉ひろき句哉

淺茅が原に遊びて晴間うれし

く露を見るに

夕立や蝻ちいさき艸の原

ゆふだちや樂屋をかふる傀儡師

夕立や家を廻りて啼家鴨

八雲たつ此嶮嶮を雲の峯

楸挽の心すかすや雲のみね

望相州

雲見草鎌倉ばかり日が照るか

うたゝ寐や揚屋に似たる土用干

夜着を着てあるいて見たり土用干

法の聲むなしき蟲の崩かな

醉登三階

酒の瀑布冷麥の九天より落るならむ

ひや酒やはしりの下の石疊

庵の留守に

すびつさへすごきに夏の炭俵

隣家に樹をすく人有。其四時

先後を愛する事をしらず。

何かいはん六月桐を植る人

市中の光陰はことさらにいそ

がしきを

秋ならずさゝら太鼓や夏神樂

御秋

夏秋御師の宿札尋ねけり

秋之部

井の柳きのふを桐の一葉哉

水の蜘蛛一葉にちかくおよぎ寄

霜山子のもとめ 晝は探雪

なり。琴と笙と太鼓と諧琴ま

れしに

右笙

けしからぬ桐の一葉や笙の聲

艸庵に水つきて住わびける僧
をとひて

手拭の筐よりもる一葉かな

春日野や風こし猿の一葉川

詞書略之

空や秋蚊屋を明れば七多羅樹

父の煩はしきを心元なくまも

り居たるに、いなみがたき會

に呼たてられて、此句を申出

たれば、一折過るほどに快し

といふを苦たり。妙感の餘り

にこゝしに侍る。

秋といふかぜは身にしむ藥哉

格枝亭桂かくしに

乾⁺兌⁺坎⁺震⁺離⁺艮⁺坤⁺巽⁺

空や秋水ゆりはなす山おろし

と御よみひへ。下の字自然に

まはりひこそ彌三五郎にてひ

秋夜話^ス三隱林^一

雨^フ冷^ヒに羽織や夜の簑ならむ

市隅

西側に燈籠ながれや三日の月
美女美男燈籠にてらす迷哉

市中の閑居

あさがほやよし見む人は竹格子

朝な／＼に咲かへて盛ひさし

きとある御歌をかんじ奉りて

薜は仙洞様をいのちかな

あさがほやとれきは咲猪口の物

朝顔にしほれし人や髷帽子

すゝきを蜚けるかけものゝ計

あさがほや穂に出るまで這あがる

薜にきのふの瓜の二葉哉

朝顔にいつ宿出し御使

道心の妻しほれて恨む極垣

七夕

星合や人の心を爪はじき

露橋や待とは宇治の星姫も

素堂が母七十七歳の秋万葉の

秋の七種の發句勸進

星の夜よ花火紐とく藤ばかり

三邊のおしへに慣ひて七ツに
なりける姫を寺へのぼせたれ
ば一日ありて七夕に歌を奉り
けるをいとおしみて

文月や産るゝ文字も母の恩

樽買がひとつ流すや天の川

妻星よあふに一刻せある女か

大切の夜は明にけり天の川

明星や額に落る鞠ほくろ

秋七種

けふ星の賀にあふ花や女郎花

女わらべの心ばへして籠に露

かひ待てるを七夕の手向舞にせ

しかば

露まつや味吟こしふせてきり／＼す

海邊晚雲

稻妻や朝暾したる空に又

彌陀のりさうをかふむらずばと

こそたのみしにこれらが結縁は

夏のうちに杓子をかぶる鼠哉

七月十日の夜東潮が食糧に杓

子のうせけるをとぶらひける
也

夢となりし骸骨おどる萩の聲

詞書あり略す

萩もがな菩薩にて見し上童

文は萩の露にありこれを略

はぎの露蛤貝にくすりかな

萩な刈そ西瓜にまくら借す男

牛に乗る姫御落すな女郎花

遍照の證

僧正よ鞍がかへつて女郎花

短冊書せらるゝ迷惑さを

葛の葉の赤い色紙をうらみ哉

髭がちなる男の椎つみたるは

にげなかるべし。

西瓜喰ふ奴の髭の流れけり

西瓜くふ跡は安達が原なれや

治徳鑑別

點せがむ人の宿かれ花すゝき

かなしとや見猿のためにまじゆさげ

芭蕉葉に雀も角をかくしけり
取る日よりかけてながむるたばこ哉
李をうへて雨を聞風のやどりかな

鑑三素堂が秋池

風秋の荷葉二扇をくゝるなり
茶釜もて眞の掃除や白芙蓉

盆會

かへらずにかのなき魂の夕かな
たらちねに借金乞はなかりけり
右の二句文あり今こゝに略す。

陀羅尼品

銀を罪の秤や墓まいり

分郊原（分倍が原）

みそはぎや分限に見ゆる欄樓

文月をかねて刺鯖を獲領し世の人のいはひくさとすと。

鯖切のかくてもへけり大赦迄
生鱈酒の下がらぬ親仁哉

花はかたみに入、葉はあしかに荷ひ分て、その勢をいとふ。

まことに切なる争ひを

親も子もきよき心や連寶
棚經や聲のたかきは弟子坊主
一長屋錠をおろしておどり哉
踊召て番の太郎に酒たうべけり
上手ほど名も優美なり角力取

露

齋院の此戸さしけん露なれや
船ばりをまくらの露や聞の外
文月やひとりほしき娘の子
子子等には猫もかまはず夜寒哉
茶のけしき咄しむころや新豆腐

芭蕉庵の夜

墨染を鉦鼓に隣るきぬた哉
砧の町妻吼る犬あはれなり

點取におこせたる懷紙の奥に

二巻に目をさましたる砧かな

宇治の山水

川霧や茶立ふくさののし加減
霧汐烟行末かけてすまの浦

寂蓮

和歌の骨櫓たつ山の夕かな
青海や淺黄になりて秋の暮
秋の心法師は俗の寐覺哉

南部の其詞尋ね來りて野田の玉川には西行上人の堀井ありと語りしに

濁る井を名にな語りそ秋の雨

七月廿一日ヨ齊三回忌なれば智海師をともしなひて 墓誌

淺井餐願寺念佛堂

三人の聲にこたへよ秋の聲

虫

まくり手に松むしさがす淺茅哉

猫にくはれしを蛭の妻はすだくらん

酒さびて蟲やく野の草もみち

元祿六百仲秋深川芭蕉庵留主の月に入て

生綿とる雨雲たちぬ生駒山

（前書と句と一致せざるが如し）

一しほの妻も有らむ天津雁

翁にともなはれて来る人のめ
づらしきに

(元禄元年越人江戸へ下る)

落着に荷今の文や天津雁

題湯豆腐

跡の湯が雁を濁さぬ豆腐哉

士は先祖の功にほこるといへ

共、身を枕席にやすんぜず、

一步戦場にのぞむ心ざし有。

古郷に文をおくりけむ人へ

は、命を道の草葉にかけて、

なつかしき詞のみを残し置れ

たるをおもひ出られて、露柏

子が愁眠をさませり。

陣中の飛脚もなくや雁の聲

暮の山遠きを鹿のすがた哉

あほうとは鹿も見らん鳴子引

刈のけよそれを縄なへ小田の鮭

カジカ此夕愁人は猿の聲を釣

さちほこに笹をかまする鱈かな

いはし性柔弱にしてもろし、

潮をはなれて忽に死す。鰯俗

字なり。よはしと訓ず。おむ
らとはいかに。

小いはしや一口茄子藤の門

ほのくゝと朝飯匂ふ根釣かな

月

池水も七分にあり宵の月

鯛は花は江戸に生れてけふの月

てつべんに丸盆おゐて月見哉

ましらふにのまざるもありけふの月

月になりぬ波に米守る高瀬歌

詞書こゝに略

名月や今年も筆にへらず口

詞書略

信濃にも老が子はありけふの月

仲曆の晝讀

月かけや舌を帆にまく三笠山

長柄文臺の記

もる月もむかしの橋の朽目哉

月を語れ越路の小者木曾の下女

有明や待夜ながらの君と伯父

満百

あり明の月に成けり母の影

娘には丸き柱を月見かな

酒くさき鼓うちけりけふの月

庖丁の片袖くらし月の雲

燃くいに火の付やすき月夜哉

盃と碗を畫て

中挽の黒いも御意に三日の月

月のさそう詩の舟か山市か川武か

僧と咄し明して

小便に起てば月を見ざりけり

眺めやる函谷やけふ驢馬迎

月日の栗鼠葡萄かつらの甘露あり

問來かし椎いる里の松葉より

御所柿や我齒にきゆる今朝の霜

いが栗に袖なき猿のおもひ哉

深川藏屋しきにて

栗賣の玄關へかゝる閑居かな

癸酉八月廿九日の晝亡父葬送

の場にて、崩心の悲を懷て四

生の起別をしる。

一 鉢に蟬も木葉も脱^もけかな
鳴たちてさびしきものを鳴居らば
種茄子北斗をねらふ光かな
稻こくや鷺^{さぎ}を握る薬の中

松吟尼の庭にさが野の土を堀
うつして、薄に松などそのま
まにもてなす中に、しめじ初
たけ有。

行かすして都の土や木の子狩
松の香は花と吹なり櫻茸

東國風來寺の山の邊を過る時

冷泉の珠數につなげる茸哉

茸狩十唱句

其表 不^ハ二班^ハ三
うら 茸^ハ四交^ハ五白^ハ六杵^ハ七
其軸 茸^ハ八燭^ハ九消^ハ半^ハ
石突 角^ハ仙^ハ屠^ハ角^ハ帶^ハ
つばみ 笠^ハ回^ハ蘭^ハ獨^ハ樂^ハ
燒松茸 松^ハ枝^ハ南^ハ返^ハ報^ハ

鹽松茸 不^ハ香^ハ松^ハ雪^ハ漬
京には一斤 茸^ハ久^ハ山^ハ雨^ハ重^ハ
といへり 其賞 北^ハ寛^ハ小^ハ松^ハ茸^ハ
献上の 祝^ハ宮^ハ崎^ハ生^ハ茸^ハ
中にも

菊

鶏の下葉つみけり宿の菊
籠鳥のゆるすにうとし園の菊
千々の菊歌人の名字しのばし
柚の色や起上りたる菊の露

重陽

菊の酒葡萄のからにしたみけり

千家の騷人百菊の餘情

菊うりや菊に詩人の質を賣
きくもみち水屋はちけて流るめり
手入かなよしある賤がむかし菊

内藤風虎公十三回忌

菊の香やたぶさよごれぬ服さし

九月九日扇を拾ひける人に

きくや名も星に輝く禮あふぎ

菜花餘別

友成は菊の使に播磨迄
子籠の柚の葉にのりし匂哉

十三夜

白鷺の簀ぬぐやうに後の月

いづれも故郷をかたるに

後の月松やさながら江戸の庭
はらゝ子を千々にくだくや後の月
樽むしの身を栗に鳴今宵哉
家こぼつ木立も寒し後の月

鳥

木兎や百會にばかり巾りもの

仁兵衛の片山かけや笑ひ菟

山がらの戸にも窓にもなら柏

春澄にとへ稻負鳥と云へる有

小鳥盡長歌

四十から小夜の中山五十から

中村少長夫婦連にて上京せし

時

山鳥も人をうらやむ旅寐哉

紀路行く山はみかんの吉野かな
山ふさぐこなた面や初もみち

新殿六間落

水つかぬ塵のはじめや下紅葉
氣のつまる世やさだまりて岩に薦
木葉の食糲を狄のにしき哉

暮秋

雁鹿虫と斗おもふてくれけり暮

九月盡

ねぬ夜松風身のうき秋を師走哉

怨問誰

傾城の小歌はかなし九月盡

冬之部

夢よりか見はてぬ芝居むら時雨
柴はぬれ牛はさながら時雨哉
神鳴のまことになりし時雨哉
今熊をしぐるゝ頃はあれぞかし

國阿の繪

我山は足駄いたゞくしぐれ哉

はせを翁七回忌

七とせとしらずやひとり小夜時雨

よそに名たつるから崎の松

しぐるゝや有し圃の一ツ松

時雨瘦松私の物干にと書けり

おもしろき人をよび出すしぐれ哉

嶋むろで茶を中こそ時雨哉

松原のすき間を見する時雨哉

此句は晋子夢に若宮八幡宮に

詣られての吟なりとぞ。

鳳 文は略

木がらしよ世に拾はれぬみなし栗

風となりぬ蝸牛のうつせ貝

芭蕉翁終焉の記 文略

なきがらを笠にかくすや枯尾花

冬來ては案山子にとまる烏哉

冬木立いかめしや山のたゝすまひ

曲翠と幻住庵にともなひて翁

の隠れ所といへる椎の木を見

る。

まぼろしもすまぬ嵐の木のは哉

玄賓を世に見るさまか干菜賣

畫讃

松一木乞食の夜着の枯野哉

坊主小兵衛道心して人々小兵

衛坊主と申ければ

坊主小兵衛小兵衛坊主と歸り花

朝鮮の妻や引らむ葉人參

網代守大根盜をとがめけり

ゑびす講

福天の床机にするや仕切帳

子は衣裝親はつねなり夷講

金藏のおれとうなる霜の聲

滋樂城の火洞にあらば霜の聲

酒くさきふとん剝けり霜の聲

貞佐新宅

此宿を御師もたづねて杉の霜

眞炭割る火箸を斧の幽なり

埋火や土器かけていちぢり焼

火爐のうたゝ寐夢に眞桑を枕とす
閑居の黠みを浮世に配る納豆哉
碇つきて又の寐覺や納豆汁

立庵

冬持の足下をかけんなるとぞめ
關守の紙子もむ矢かたつか弓
朝嵐馬の目で行頭巾哉
ふれみぞれ格の花の七日市

宿僧房

あられなし闍伽の折敷に冬菜哉
取次へ霞をはじく長柄かな
武藏野や富士の霞のこけ所
越後屋の算盤過て小夜衛
鳴千鳥幾夜明石の夢おどろく
村千鳥その夜は寒し虎が許

人の妻むかへたりしに

鶯燕の盃とちようすこほり
つくぐと壁の兎や冬籠り
達磨忌や自刺にさぐる水かぢみ

夜興

夜興引盜人犬やたつた山
犬引て豆腐狩得たり里夜興
菰一重わぶや乞食のぬくめ鳥

顔見世 市川三升を祝す

みつますやおよそ氷らぬ水の筋

夜學感

鶯氷る夜や蛭蟬灯盡に羽を閉て

長屋割付られし人の有明の月
に酒賣不許入内とてなきあか
したり。

水窓の綱手もきるゝ氷柱哉

蠅むきや我には見えぬ水かぢみ
町神樂店前のひがけをかつらとし

貞徳翁五十年忌 元禄十五年

壬午霜月十五日 懷舊の心を

述侍る。

帯ときも花橘のむかしかな

霜月廿七鳥候 三丁寅門光園卿

之御茶亭 題 三周山之佳景

一 びるどろの御茶屋

むかふに清水雪羽をうつし
まふけ給ふ。高田の奇山、
あたごととおもはる。

水の工み醉顔清し氷茶屋

二 清水寺音羽

櫻精舍梢や千々の雪ざかり

六角堂、孔子堂、小町が石塔
なんどあり。むなしく行過ぬ。

三 耕作の御茶屋

丸屋といふ茶屋に蔭はへる
へついありて、大根蕪ねぶ
かなど引うへ、枯たる梢に
鐵をかけたなり。

根深ひく麥の早苗やあやめ艸

四 黒木の御茶屋

此道すがら竹生嶋をわたる。
堂舎樹林いたづらに見残し
ぬ。茶屋の跡かやぶける軒

に酒旗をかゝぐ。軒端に黒
木つみ置り。

我や賤牛に雪咲黒木茶や

五 藤棚

冬枯たり。藤二本にて三丁餘

あり。

藤葺やあられにやどる不破庇

六 西行堂

道のべの清水柳衰也。彼法師よしの山に閉て、とくと落とる岩間の青清水くみほすほどもなき住居かな。

と言しをよせて

炭や岩間こかしの清水とくくくと

七 唐橋

唐門を見て長はしを渡る。海あつて等閑に汐干を見せたり。

長橋や勢田にあひ見んふどき松

八 八はしの花のかほよきを

耻て

坊主影月にも冴よ御川水

九 河原書院はじめて御書院

を拜しての賀

八千代とぞ河原御館の御千どり

十 西湖

はじめびいどろの御茶亭に

入る時、猶句を惜むてけり。

夢に扁舟に乗じて西湖にあそぶ。と言し東坡がことを

次て

詩をあさる成らむ雪の樽小船

右十章

茶の幽居炭の黒人を佐名なり

松風や爐に富士をやく西屋形

佗に絶て一爐の散茶氣味ふかし

飯

妻ならぬ鰥なうらみそ小夜衣

鐵炮のそれとひびくやふぐと汁

手を切ていよくにくし鰥の面

詩人ゆるせ松江の河豚といはんに

鯖にこりず鰥にこりず雪の鰥

文略す

茶の湯にはまだとらぬ也瓢汁

鮫鱈をふりさけ見れば厨かな

足袋うりやたびかさなれば學鰥

雪

はつ雪や大の面出す杉の垣

腸を塩にさけぶや雪の猿

饅飴屋へ行念佛也夜の雪

文畧す

黒塚のまことこもれり雪女

埋木のふしみ勝手や雪の友

富士の烟のかひやなからんと
の御製をよくく了簡せば、

ふじ無念に思ひ、淺間を討ぬ
べきもの。とかく作を鹿相に

極め置て、淺間がうらみなる
べしといひて

諷にてあさまになりぬふじの雪

雪の日は聲斗賣くろ木哉

富士うつす麥田は雪の早苗かな

青漆を雪の裾野や丸合羽

なら茶の詩さこそ盧全も雪の日は

はつ雪に此小便は何奴ッぞ

拔出して雪うち拂ふ柄袋

雪おもしろ軒の掛菜にみそさどぬ

秘藏の鴉の落たるをおしめる

人に

墨染に御巾や雪うづら
朝ごみや月雪薄き酒の味
雪に間へばかれも蘇鐵の女なり
秋にあへ師走の菊も麥畑

極寒

さためよの遺精もつらし寒の水
伊勢綿を着ぬぞまことの鉢扣

鉢扣

鉢扣ききく 曉かたの一聲に
初音きかれて はつがつほ
花はしら魚 もみぢのはぜ
雪にや鰻を ねざむらむ
おもしろや此 樽たきき
麻ざめく づねならぬ
世をおどろけは としのくれ
氣のふるふなる ばかりなり
七十古來 稀なりと
やつこ道心 捨ごろも
酒にかへてん 樽たきき

あらなまぐさの 樽たききやな
凍死ぬ身の 曉や樽たきき

漫成五倫
君臣有義

家の子等けふを忘るな年忘

父子有親

鮑汁や憎き姫には猶くれじ

夫婦有別

鉢たききめおと出ぬも哀なり

長幼有序

袴着は娘の子にもはかま哉

朋友有信

君と我爐に手をかへすしかなかれ

大小の吟

大庭をしろくはく霜師走哉

二四六
元禄十丁丑年

荷よばりの小坊主にこそ師走聲

竹町渡しの蜚語

節季ゆや口をとちたる渡し舟

元日を起すやうなり節季候

節季は左の耳になるとかな

辰之助に申遣す

煤拂や諸人がまねる鎧おどり

寒苦鳥明日餅つかふとぞ鳴けり

いざくまん年の酒屋の上へたまり

酒債尋常往處有人生七十古來

稀

詩あきんど年を食る酒債哉

流るゝや千手陀羅尼の年の垢

年中の放下見へけりとしの暮

豆をうつ聲のうちなる笑ひかな

乾元の節分

長き夜の遠くて近し得方丸

三升所持鐘庵の自盡譜

今こゝに團十郎や鬼は外

流るゝ年のあはれ世につくもかみさへものうき

年越や只業平の御袖ひき

はせを翁はてのとは、堅田

のゆかり、伊賀のしるべ、お

もひの外になりぬるをわび

て、うつしの山より人へに申

置捨に笈の小文や年の暮

住すてし幻住庵にはいかなる
句をか殘されけん。それはそ
れ、さて世の中をうけ給るに

妖ながら狐貧しき師走かな
大晦日ねいつたうちが年忘れ

御玄關より破魔弓をかぞへ奉

りて

誰いふとなしに大殿とし忘れ
行としも戸板めでたし餅の跡
行年に唾吐らむかゞみとき

聖代

鶴おりて日こそ多きに大晦日

雑之部

十及の圖 畫は略之

往昔異邦の佛鑑禪師十牛を
圖して人間迷悟の間をしめ
されたり。其書を狂言にし
取て、牛は聲音妓有也。又
及ともてあつかふは誹な

れば也。爰に十及の圖を畫
し侍て笑を万世に残すもの

晋 其角

尋 牛

やみの夜はよしはら斗月夜哉

呼 牛

よぶこ鳥あはれ聞てもきかぬかな

隱 牛

夏の夜はねぬに疝氣の起りけり

貧 牛 〔貧〕恐くは「食」な
らん

仁朱判やとるがうへにも年男

廻 牛

小便も笥にあまる五月かな

番 牛

ほとゝぎす曉傘をかはせけり

無 牛

きりくす枕も床も艸服哉

半 牛

何となく冬夜となりを聞れけり

送 牛

さめよとの千手陀羅尼や霜の聲
老 牛

けふもまたうどんのはいる時雨哉

於冠里公各題五色梅

黒 梅

黒梅や華の調べのかけちがへ

花がたのまだ干ぬ華や梅の露

村雨のとぎれくや曾根の松

凡蟬丸より官をつぐ坐頭の都
とはいかにといはれて

三味線に引て残りし四の緒の

一子はめくらの名になりけり

しからば城とはいかにといふ

時

幸になりあがりたる土めくら

城といふ字のかきのぞきせよ

捨子ありとて一町世話をやく

を見て

子を捨てむなしく歸る親の身の

金をひらはよくやしからまし

盆會

なき魂も三日いやるはあはれなり

十日いやらばさぞなあき風

ひさしくへだよりし人のもと

より、見にくきすがたを得わ

すれずと申けるに

馬糞紙にきたなきつらといふ文を

あくるわびしきかつらぎの神

我死ば桃梅柳うすき酒

鳩のむらさめ加茂のあけぼの

追加

客すきや心を花に浮蔵主

餅配り國栖人ごまめ奏してより

天智天皇

打おさむ入鹿が首に四海波

夢なを寒し隣家に蛤をかしく音

鎌倉にて

山賤が額の瘤のあつさかな

晝讀

餅花や鼠が目にはよし野山

妙法蓮華經

たへなりや法の蓮の華經

雪荷亭の花見にまかりて

身をひねる詠なりけり糸櫻

自書譜

棹鹿やはせをに夢の待合

團より大工召けりむろの梅

九條殿御下向

傳奏にものかは見ばや花の門

御殿場に馬休めけり大根引

御師殿は先こなたへと大根引

駿州久能の別當さんさめかし

て御通りあるを

ゆゝしさや御年男の旅姿

岩延享四丁卯年秋八月全編校合

成

百萬旨原

續土元集 其角附合 全部三冊出来

江都書肆

日本橋通二丁目

前川左衛門梓